

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

### 1. はじめに

#### （1）本企画の趣旨

私は、去る3月31日に、思うところがあつて、26年間勤めた琉球大学教育学部を、2年前倒しして早期退職しました。

現在は、教育協働研究所という名称の事業所を立ち上げ、これまで行ってきたゼミ活動や授業との関わりを持たせた、学外の方達との研究会活動等、言わば一人という自由な立場で、装いも新たに始めようとしているところです。

ただし、今年度は、非常勤講師として、これまで担当していた大学の講義（前期4コマ・後期4コマ）を、引き続き担当することにはなっていますので、基本的な生活スタンスは変わらないと思つています。とは言え、給与の違いは論外ですが、常勤と非常勤の違いは様々なところがあり、3月までの自分と4月以降の自分とは、まさに180度違った感覚で、業務や活動を行っている次第です。

さて、本連載では、事前の編集部との企画合意の下、標題のようなテー

マ・タイトルで、私の、これまでの大学での講義やゼミ学生等との学習・交流活動を振り返りながら、教員養成を主軸とする教育学部に、何故、社会教育主事資格取得のためのプログラムが必要なのか、そしてまたそのプロセスにおいて、若者達（琉球大学生）が、どのような出会いと学びの場を享受しているのか、26年間の悪戦苦闘の日々ではありましたが、そうした場と時間を、ある意味意図的にお膳立てをし、見つめ続けてきた者として、その全容の一部ではありますが、それらをみなさんにお伝えしたくて、このような機会を設けさせてもらいました。

読者のみなさんにとっては、直接は与り知らない場所や人間関係のことで、すので、あまり興味・関心が湧かないかもしれませんが、これも、ある種の「青年教育」の実践の報告ではありますので、そうした観点からのお付き合いをいただければ、まことにありがたいことかと考えます。

#### （2）全体構想

そこで、改めて、まずは全体の企画

構想ですが、各回に若者（学生）達のブリーフ・メッセージを載せながら、可能ならば「学外者」、単純に言えば「大人」の方からのもの入れ込みながら、これまでの授業・活動を振り返るとともに、そこにおける個々の意味や教育実践としての価値や有効性等を、私なりに咀嚼し、それらをみなさんにお伝えできればと考えているところです。

記事内容的には、琉球大学での、社会教育主事資格取得プログラムについて、そのプログラムの内容やこれまでの実施状況、そして、それらに関わる学生達の受講状況やその後の進路等についてお知らせすることになりますが、公的な報告ではありませんので、その旨ご了解をいただくとともに、若者（学生）達、さらには関係して頂いている「大人」の方たちの学び・実践の姿、交流の在り様を、温かく受け止めていただければ、過分の幸せかと思えます。

現在、具体的には、以下のような企画構想を抱いていますが、何かご意見、ご要望等がありましたら、いつでも結構ですので、お寄せいただければと思います。

〈参考：今後の展開構想〉

- 「琉球大学での取得プログラム」
  - ・取得プログラムの紹介とこれまでの状況／学生達の受講状況とその後の進路 等
- 「科目提供で苦慮してきたこと」
  - ・科目提供の負担・工夫／専任一人の大変さ
- 「教育原理」
  - ・広く教職を目指す学生達に対して／「教育原理」とは何か、そこにおける「生涯教育（学習）」の位置付け
- 「社会教育概論Ⅰ・Ⅱ」
  - ・教職用（Ⅰ）…社会教育の動的理解（全体的・総合的）／社会教育主事資格専用（Ⅱ）…社会教育の静的理解（個別的・具体的）
- 「社会教育計画Ⅰ・Ⅱ」
  - ・理論的理解（Ⅰ）／実践的理解（計画の模擬作成）（Ⅱ）
- 「社会教育実習」
  - ・現場に行く（お世話になる）ことの重み cf. アクティブ・ラーニング／学生側、迎える側、双方にとっての意味
- 「社会教育課題研究」
  - ・若者（学生）達の気付きとアクション／卒論等への誘い
- 「地域教育経営演習Ⅰ・Ⅱ」
  - ・新たな目的・方法論としての「地域教育経営演習」／ゼミ活動（→サークル活動）とのリンク
- 「地域社会と学習・文化」、その他の科目
  - ・地域に目を向ける意味／実践家、「意味ある他者」との出会い
- 「学社融合と学びの共同体づくり」
  - ・新基軸としての取り組み／「教育協働研究会」との連動／「教育協働」の理論としくみづくり
- 「レポート・レターにみる若者（学生）達の学びのプロセス①」～若者（学生）としての成長～
  - ・「青年教育」の場としてのゼミ・サークル活動
- 「レポート・レターにみる若者（学生）達の学びのプロセス②」～教育人材・関係者の卵としての成長～
  - ・「人材養成」の場としての研究会活動
- 「レポート・レターにみる若者（学生）達の学びのプロセス③」～一人の人間としての成長～
  - ・「人間形成」の場としての「大学」
- 「おわりに、そして新たな発信」
  - ・活動や事例紹介あるいは情報交流、手紙（メール等）のやりとりを通して
  - ・「教育協働研究所」の紹介

## 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

### 2. 琉球大学での社会教育主事資格取得プログラム

#### （1）取得プログラムの紹介とこれまでの状況

改めて、まずは、琉球大学での主事資格取得プログラムについて紹介します。その履修科目一覧を示したものが、表1となります。とにかく、専任一人という状況の中で、必要取得単位数24単位を準備しなければならなかったわけですから、とてつもなく過酷な（悲惨な？）状況であったわけです。以前は、非常勤の予算枠も、今よりはかなり確保されていきましたので、本資格関係専用の科目提供もできていました。要するに、この間、涙を吞んで取り下げた科目も、いくつかあったということですが、

とにかく、その非常勤講師には、例えば県外から、私の知己・先輩等の大学教員・研究者等も呼べていましたし、県内で知り合った現場の協力者等にもお願いして、かなり多様な科目提供ができていました。今は、懐かしい限りです。具体的な苦勞？話は、それこそキリがありませんが、大変な工夫とエネルギーが必要でした。よくやれたものだと、今更ながら思います。若かったということもありますが、一番大きい要

因は、率直に言いますと、現状への告発？と、今に見ているという、胸に秘めた思いがあったように思います。本学のような、地方の、しかも小規模な学部にあつては、たとえ主事資格のような専門資格であつても、最小（低？）限の組織・スタッフ構成でやるしかなかったのです。

そういうことで、現状を、ただ嘆いてばかりではどうにもならなかったわけですし、基本的には、狭い意味での教員養成のための組織・スタッフ構成でしかなかったのですから、意地を見せるしかなかったのです。ある意味、私の専門分野あるいは私自身（のポスト）も、その教員養成用のスタッフの一員として、何がなんでも食い込んでいかなければ、それこそ、そこでの存在意義が、二重の意味で掻き消されるといふ危機感もあつたのです！ つまり、主事資格それ自体の存在意義と、もう一つは教員養成の枠組みにおける社会教育分野の位置づけの、二つの意味合いにおいてです。ただし、残念ながら、結局は、今般の国立大学再編（「ミッションの再定義」）の中で、そのことが実現？されたのですが…

いずれにしても、このような状況の

表1 履修科目表

(社会教育主事資格取得要件)

平成24年度現在

省令指定科目	単位	本学における相当科目		単位	学期	履修年次	備考	
		科目番号	授業科目					
生涯学習概論	4	全教 214	社会教育概論Ⅰ	2	前	2～4	必修	
		生子 227	社会教育概論Ⅱ	2	後	2～4	必修	
社会教育計画	4	生子 228	社会教育計画Ⅰ	2	前	2～4	必修	
		生子 229	社会教育計画Ⅱ	2	後	2～4	必修	
社会教育演習、社会教育実習 又は社会教育課題研究のうち1以上の科目	4	生子 316	社会教育実習	2	前	3～4	必修	
		生子 317	社会教育課題研究	2	後	2～4	必修	
社会教育特講	社会教育特講Ⅰ (現代社会と社会教育)	教職 121	教育原理	2	前・後	1	選択	
		全教 121	教育原理	2	前・後	1	必修	
		教職 212	教育行政学	2	前	2～3	選択	
		生子 318	学社融合と学びの共同体づくり	2	後	2～4	必修	
	社会教育特講Ⅱ (社会教育活動・事業・施設)	12	生子 201	地域社会と学習・文化	2	前	2～3	必修
		生子 322	学習環境デザイン論	2	前又は後	3～4	選択	
		生子 304	地域教育経営演習Ⅰ	2	前	3	選択	
	社会教育特講Ⅲ(その他必要な科目)	2	生子 302	学校外教育演習Ⅰ	2	前	3	選択
		2	生子 306	学校外教育演習Ⅱ	2	後	3	選択
		2	生子 308	地域教育経営演習Ⅱ	2	後	3	選択
		生共 103	健康と栄養	2	後	1～4	選択	
計	24	24		単位				

(注) ①資格取得に当たっては、2年次からの計画的履修が望ましい。  
 ②概論Ⅱ及び計画Ⅱについては、各々Ⅰの履修が済んでいることを条件とする。

中で、ほとんど一人で科目提供もし、非常勤講師の依頼・対応(「集中講義」の時は、宿泊や交通手段の確保等もありました！もちろん、食事等も！)、さらには社会教育実習先の選別・依頼・対応と、それこそ授業、そして教務・事務の双方で、東奔西走の毎日でした。でも、やりがいもありましたし、とにかく新しいことを自分の思いと動きで、すべて創り出していった訳ですから、心地よさもありました。ちなみに、これは余談ですが、途中で知りましたが、資格取得プログラムを提供している大学でのランキングが文科省の中にあり、本学は、確かCランクとされていたようです?! 取得資格に変わりがありませんから、それはそれでよいのですが、内容等のレベルで評価されていたとしたら、本心では、それこそ悔しい限りです！ 専任一人なのでですから、それ自体が原因だということであれば、それはそれで仕方がないのでしょうか？

(2) 学生達の受講状況とその後の進路等

ところで、他ならぬ学生達の受講状況とその後の進路等については、これは、決して大学(私)のせいではないと信じて

いますが、この社会教育主事資格そのものが、彼らの進路、具体的には教員や行政等への就職に、直接結び付くものではなかった（今でもそれは変わらない！）ということが、やはり挙げられると思います。こんなにも、直接就職と結びつかない資格があるのかと、冷静に受け止めれば、まさにそう思えるほどです！

そんなこともあつてか、私が琉球大学に赴任した頃は、県内の某私立大学でも資格付与のプログラムがありました（非常勤で手伝いもしました！）、やがて閉講となつたことが思い出されます。やはり、現実的・即実的なメリット（実績？）がなければ、経費の無駄ということにもなるのでしよう?! その時は、生涯教育（学習）のローガンがもてはやされ始めている頃でしたが、それとこれとは、やはり次元の違う話ではあつたのでしょうか!?

社会教育主事は、ご承知のように、都道府県・市町村の教育委員会の事務局に置かれる、専門的教育職員なのですが、その必置制の規定とは裏腹に、多くの自治体は、例の社会教育主事講習で資格取得を促し、その人事・職員配置においても、言うなれ

ば「自転車操業」的に、それに対応してきているように思います。それはそれで、一つの既成事実としてあり、またそのこと自体を、狭い意味での関係者以外は問題としなかつた、否、それを黙認・無視していたとも言えるでしょう! 学校の教員の配置話とは、質量ともにまったく違っているわけです!

もちろん私は、そのことに対する憤りと、改善に向けての理論構築や、そのためのアピール言動を、機会あるごとに行つてきたのですが、行政の基本的なスタンスは変わっていませんし、むしろ悪くなっているようにも思います。専任職員としての実数（配置率も）が、市町村合併の影響があつたとしても、確実に減り続けているのです!

ただし、そういうことだけに拘泥したわけでは、決してありません! どうせ、そうした方向での改善が望めないのなら、そしてまた、それはそれとして、実質上、一方で社会教育主事の資格や、それに関わる経験や学習が、何らかの形で生かせる、あるいは批判や文句だけを言い続けるよりは、その地域、あるいは人々の学習や活動に、はるかにいい影響や成果を生み出すことが

できるのなら、そちらの可能性を伸ばす、あるいはそちらの方からの事態改善の方が、結局は早道なのではないかということも、考えるようになりました!

実はそれが、最終的には、今現在のような、学生と、地域の中で様々な事業や活動を行つている人達との交流や連携・協力を介しての教育的効果や、それらが生み出していく人と人とのつながり、そして一部では、そうした人々との協働活動あるいは就職先の一つとしてつながっていくことも、結果的にはあります。主事資格取得のプログラムがあるからこそとも言えるのです。もちろん、教員を目指す学生にとつても、実質的には同じです。

否、むしろ教員を目指す学生にとつては、結果としてではなく、それ自体に意義があるというようにも思います。それは、社会教育主事というよりは、むしろ新しいタイプの教員像、教員としての新たな専門性の一部が、そうしたプロセスや経験から生み出されていくということです。そのことは、次のメッセージからも、十分に感じ取れるでしょう!

## メッセージコーナー

**(3) 若者(学生)たちは、このように思っていた!! ~Y.Tからのメッセージ~**

私が、「社会教育」「地域教育経営」に出会ったのは、26年前の大学の講義です。当時2年次であった私は、3年次からのゼミを選考する方法の一つとして、社会教育関係の講義をとりました。その時はじめて、社会教育という言葉や社会教育主事という職務について知り、教育を、学校教育のみの、限られたものとして捉えていた私の概念が、大きく揺さぶられたことを覚えています。とは言っても、当初は、今後の私自身の教育に対する考えの中核になるものとはまでは、考えてもいなかったのが正直なところでした。その後、その講義の担当であった井上先生のもとで、26年間も学ぶとは予想もしませんでした。

大学では、ゼミ活動を満喫したというのが思い出であり、何を学んだかというよりも、日々井上先生のもとで、ゼミの仲間や学部の仲間と、楽しく過ごしたことが思い出されます。授業は真面目?に受講していましたが、もっぱらゼミ活動や飲み、スポーツや釣り等をしていました。しかし、今となっては、それらの活動をとおして学んだことの多さを実感しています。大学を卒業してからは、公立小学校の教員となり、日々子どもたちと楽しみながら、授業実践を行いました。そこでは、大学で学んだ社会教育との連携・協働の取組への思いはありましたが、なかなか実践できていない状況でした。今、当時を振り返ると、伝統的な学校文化の中で近視眼的になってしまい、学校完結型の教育を行っていたように思えます。公立小学校で5年間勤務した後、琉球大学教育学部附属小学校の教員となり、体育科を中心とした教育実践研究を行いました。そこでも、学校完結型の授業実践に留まっていたように思います。

そこで転機が訪れたのが、教職10年目で、大学院で修学する機会を得たことです。小学校の教員を10年間経験した後に、再び井上先生のもとで学ぶ機会を得ることができました。完全に2年間教職を離れ、大学院で教育について考える機会をもち、じっくりとこれまでの実践を振り返ったり、大学生と共にゼミ活動を行ったり、そこから新たな実践を考えたりする貴重な時間となりました。その経験を踏まえ、学校現場に戻り、実践を行いました。学校でやるべきことはしっかり行い、学校以外の活動へも子どもたちを誘い、学びの質を高める実践に心掛けました。また、学校以外の人や機関とも積極的に関わり、学校を核とした地域づくりへのアプローチも、多少試みることができました。

その後は、県教育庁の社会教育主事として勤務することになり、大学で学んだことを実践する機会を得ました。県教育庁では、県内市町村の社会教育主事の資質向上等の業務を担いました。そして現在、小学校の教頭の立場で、学校運営にあたっています。管理職となり、より社会教育を学んだことが自分自身の業務に生かしていると思います。それは、学校以外の関係機関との連携・協働が、学校の教育効果を上げる実感があるからです。26年前に井上先生や「社会教育」「地域教育経営」に出会わなかったら、現在のような取組はできていないと思います。教育を狭い視野で捉え、子どもたちの教育の効果を地域と共有する発想は、なかなか生まれなかったと思います。

最後になりますが、大学院を修了した後、本務を行いながら、大学の非常勤講師として社会教育主事養成の講義を持つこともできています。この様な機会を得ることで、深く学ぶことができ、自分自身の大きな力となっています。大学から現在を顧みて、井上先生と出会えたこと、「社会教育」「地域教育経営」と出会えたことに、幸せを感じると同時に、とても感謝しています。今後も学び続け、学んだことを、子ども達や地域社会に還元していきたいと思っています。

(公立小学校教頭・琉球大学非常勤講師)

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

## 3. 科目提供で苦慮してきたこと (1) 科目提供の負担・工夫

前号で述べましたように、とにかくこの26年間余の琉球大学での教員生活で大変だったのは、授業における科目提供の負担や、そこにおける工夫でした。赴任した時には、前任者が担当をしていたものを（実際はまだ予定だった！）そのまま受け継ぐだけでよいと思っていました。蓋を開けると、とてもじゃありませんが、まったくそのようにはいきませんでした。

例えば、今となってはかなり懐かしい、「教育学専修」という教育組織の一員となつたのですが、やはりそのためには、（当初依頼された）専門の「社会教育主事資格」関係の授業だけを持つということは、各教員の負担度からすると、それだけでは済まされないというようなこともあって（ただし、結果的には社会教育主事関係だけでも相当な負担ではありました！）、いわゆる教職の関係科目も分担することになったのです。また、それをやらなければ、私だけが、その組織の中で孤立するのではないかという、ある種の危惧もあったように思います。その後（多分3年後だったかな？）、現在

も引き受けています「教育原理」（前・後期1コマずつ）を担当することになったのですが、最初は現有教員の数、あるいは専門等の関係もあって、何と「特別活動」を担当することになったのです（すぐ後に、確か「教科外教育Ⅰ」と名称変更されました！）。この科目は、社会教育（活動）に一番関係のある分野と言えなくもありませんでしたが、全くの素人状態で臨んだものですから、内容・方法ともに、大いに苦慮しました。とりあえず、遅ればせながら、関係の学習指導要領等にも目を通し、それなりの対応もでき始めたのですが、その後のカリキュラム改革に伴って、「教育原理」の方を受け持ったということでもあります。

ちなみに、その「特別活動」を持つということで、私自身の研修のつもりで、隣接する附属小中学校の公開研究会に参加したことがきっかけで、これも、今思えば甚だ恐ろしい？気もしますが、当時の附属小学校の担当教員から、一応学部の担当教員ということだと思えますが、その公開授業の「指導助言者」を依頼され、以来かなりの年数、それを引き受けてきたことは、別の意味で大いに驚きかと思えます。附属学

校、とりわけ附属小学校との関係は、新たに「総合的な学習の時間」まで飛び火し、誠にもって気恥ずかしい？展開となったことは、実を言うと、あまり思い出したくない過去とも言えます。

とは言え、そうした関係の中で、赴任1年後から担当し出した「大学院」での、ゼミ学生のリクルートの場にもなったよう、附属小、あるいは公立の小中学校の現職教員達が、奇妙にも私の指導学生として、数多く(相対的にですが!)入学(ゼミ)してきたのです。なかには、私の専門分野というよりは、大学院での勉強(研修)の機会の気軽さ?で、私のゼミを選んだ学生(現職教員)もいたようですが、多少、舐められていたのかもしれませんが!!

しかし、やはり彼らとの出会いやつきあいがあつたからこそ、学校教育関係者との関係も、随分広がったように思います!それがまた、並行して広く教育行政全体(社会教育行政だけでなく!)への参画・協力へのルートにもつながっていったように思います。附属学校出身者は、附属学校卒業?後、県や市町村教育委員会の事務局へ出向(異動)することが多いからです!

## (2) 専任一人の大変さ(エレジー風?)、でもやりがいもあつた!

次に、改めて授業の工夫という点で言いますと、大人数のクラスにおける受講学生の毎回の出欠確認(こちらの方が、事実上はメインだった?)と、その日の授業の理解度を見るために、一枚の小さな用紙を配り、それに書き込んだものを、次の授業に反映させようとしたことです! 毎学期2クラス(1クラス100~120名程度だったかな?)が、そうした大人数の授業でしたので、毎週そのチェックは大変でした!その後、それに「学習メモ方式」という名前を付け、自画自賛かもしれませんが、そのやり方も、徐々に洗練?されたものになっていきました!

しかし、この間、驚くなかれ、「代返」ならぬ「代筆?」まで行った学生もいました! もちろん、ほんの一握りの学生達でしたが、これには、いささか驚き、と言うより、哀しみのために?言葉も出ませんでした! 自分自身が、本当に惨めにも思えました! 学生達にとっては、そこまですりでも、単位が欲しかったのでしようが、

私にしてみれば、「そこまでやるのか?!」という思いでした! やはり、「情」が通じない若者がいた(る?)のです!

いずれにしましても、このように、全学生が、そうした方式を前向きに受け止めていたかについては、多少心許ない部分もあつたということ、しかし、やはり大方は、前向きに受け止めてくれていたと思います! 事実、「学習メモ方式」等に対して、称賛や感謝の意を表していた学生も、一方ではいました! さしずめ、大学での、「ミニ赤ペン先生」というようにも、言えるのかもしれませんが! しかも、クリア・ファイルを使った、その毎回の積み重ね(書き込み)は、受講学生達にとっては、小中学校で盛んに取りいれられている(今はどうか知らないが?)、ある種の「ポートフォリオ」学習になったとも言えるのではないのでしょうか!!

また、工夫したことと言えば、講義形式の授業では、教科書の代わりとして、自作のワークシートを作成し、事前に学生全員に配布し、それに沿って授業を行っていたということでしょうか! 他人の作成した教科書や、自らも分担執筆した教科書もあつたのですが、残念ながら、終始それを使

用するのは困難で、というよりは、自らの授業内容あるいはテーマ構成にとって、コンスタントにそれを活用するのは不具合があったため、別途自前のテキストを、自らの研究費を使って作成、配布していたということですから！ 学生に対しては、高い教科書代を少しでも軽減出来たらという思いも、少なからずありました！ ただし、そのことについて、何人の学生が感謝？していたのかは、推して知るべしというところでしょうか？！

なお、そのワークシートは、これも、自分で言うのも何ですが、内容・テーマ構成的には、他の市販の教科書に決して劣っているとは思えない代物だと、自負していました（ここで過去形にしたのは、近年では、その経費の出所である研究費も、全体的に縮減され、冊子形式のワークシートにするのが難しくなり、配れていないからです）。本当は、それらをすべてまとめて、社会教育主事関係の総合テキストとして出版できればとも考えていましたが、結局は、今は記念品？的に一部我が家にあるだけです！ 今現在、ゼミの学生達に手伝ってもらって、毎回その元データ（「原本」）をコピーし、次の週の予習用として、例の「学習メモ」

と一緒に、全員に渡しているのですが、やはり学生達にとっては、ただの紙切れ（プリント？）扱いになっていくようです！ もっとも、最近の学生は、御多分に漏れず、活字ばかりの文章は、たとえ立派な冊子であつたとしても、ほとんど読まない（読めない！）ようですが……。

とにかく、以上のように、専任一人という大変さはあつたものの、工夫次第では、成果も挙がつたし、やりがいもあつたということですが、一つだけ、今でも、ある意味悔しさ？として想い出されるのが、各種の歓迎会や送別会等での世話役への抜擢？です！ 社会教育の分野の人は、そういう役割に慣れているのではないかと、社会教育は、そういう飲み会とか、場を盛り上げなければいけないような場面に強いのではないかというような、多少軽蔑的な言質を、何回か吐かれていたことです！ 多分、それを口にした人は、社会教育のある面を見聞きした人であろうし、それこそ、その場の雰囲気や和らげようと、軽い冗談のつもりで言ったのかもしれないし、しかし、私が、どういう思いでそれを引き受けていたのか、本当に分かってくれていたでしょ

うか？！ まあ、今となつては、どちらでも構いませんが……。

私も、その時は若かつたし、一時期は最年少でもありましたので、甘んじてその言質を受け止めていましたが、社会教育それ自体が、そういう分野だと、すなわち、他の教育学の分野とは違う、あるいは一段下の分野だと見られていたのではないかということであれば、やはり腹の立つ話なのであります？！ もちろん、表面的には、笑顔でそれをやり抜き、その大役？をいつも果たしてはいました！ 感謝されたかどうかは、別問題ですが……。

以上、今回は、これで終わりとなりますが、次の(3)のメッセージは、私が、このような形で孤軍奮闘？してきた教育学専修時代から、10年後の学部改革の一環で新しく設置された「島嶼文化教育コース」に配置換え（学部教育上だけですが！）となった時に、言わば「栄えある1期生」として入学してきた、ある卒業生からのメッセージです！ かなりの型破りな教員であつた？ことがバレそうですが、今でいうキャリア教育とか、あるいはアクティブ・ラーニングの要素も、多分に入っていたのではないのでしょうか？！

## メッセージコーナー

### (3) 若者(学生)たちは、このように思っていた!② ~H.Y.からのメッセージ~

私が井上先生に出会ったのは、今から17年前、大学に入学してすぐの1年次の時でした。私の入学した学科はこの年に新設されたコースで、その担当の教授が井上先生であったわけです。新設コースの1期生ということもあり、講義以外にも、野球をしたり釣りをしたり飲み連れて行ってもらったりと、何かと気にかけて頂きました。大学での学習(遊び?)活動の中で、「社会教育」や「地域教育経営」という分野を知り、「教育で地域を元気にすることができるなんて!」と、学校教育とは違う教育的アプローチの存在に興味を抱き、3年次の時には井上先生のゼミで学ぶことになったのです。

さて、井上ゼミですが、座学による知識習得よりも、「人との関わり」の中で自分なりに様々なことを習得せよ!と言わんばかりに、毎月1回、年代も職種も様々な大人の皆さまの話聴き、学生が自分たちの考えを発表するという活動がありました。その催しの運営等もゼミ生の役割で、当時の私(いや、私たち?)は、正直「週末は潰れる、準備も大変、なんて面倒な……」と思いながらやっていたこともありましたが、しかしこの活動を経て、社会人としての基礎的な能力(人前で意見を述べる・対人関係の構築や調整力や斥候力等)が身に付き、社会人1年目には、ことのほかスムーズに仕事が出来たことを思い出します。さらに、多くの人と知り合うことで、社会に出た時の「人つなぎ」効果があり、今となっては、すごく実学的な活動だったと思います。

私自身、このようなゼミ活動等で出会ういろいろな人との関わりの中から、講義やテキストでは手に入らない人々の思いや考えを伺い知り、井上先生と研究室で紫煙を燻らしながら、様々なことを聞き学ぶことで、自分なりの「社会教育」「地域教育経営」の視点が見えてきました。地域社会に住んでいるのは「人」であり、その人々が何を考え望んでいるかということを知ることは、やはり「人」とかかわることから始まるのではないかと考えたのです。地域や社会といった大枠で考えるだけでなく、「人」を考えることで、「地域教育経営」の可能性を感じました。そして、人との関わりを輪を広げる「支点」を子どもと捉え、子から親、親同士から地域へと広がることで、地域活性化につながるのではないかと考え、現在は小学校教諭として働いています。

自分自身、やりたいと思えることを見つけることができたのは、大学で井上先生から学んだことのおかげだと感謝しています。社会教育主事の資格を持つ教員として、「学校から地域を元気に!」できる方法を模索しながら、今後も学び続けていきたいと思いません。

(県内公立小学校 教諭)

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

## 4. 「教育原理」に関わって

### (1) 広く「教職」を目指す学生達に対して

さて、最初は「特別活動」から始まった、私の教職科目分担ですが、前号にも書きましたように、赴任数年後から、いわゆる「教職科目」の基礎・基本である「教育原理」を担当しました。これはまさに、教職志望の学生達が「教員免許状」を取得するための、大きな第一歩となるものです！ 教育の理念や関係の人物や概念、法制度的な枠組み、あるいはその歴史やそこにある重要事項等を、実際にはかなり概略的なものとなりますが、講義・解説していくものですよ！ 端的には、「教育とは何か？」ということ、理解する授業です。

ただし、私の「教育原理」は、もう一つの、社会教育主事資格の必修科目としての位置づけもありましたので、他の担当教員のそれとは違って、学校教育を中心としながらも、社会教育や家庭教育も視野に入れた、まさに教育の全体における、教育についての理解（考え方や理念等）を扱ってきました！ つまり、その頃から上昇気流に乗っていた？ 「生涯教育（学習）」の理念を柱に、授業を行ってきたということです。

しかし、制度的には「教職科目」の基礎・基本ということ、受講年次が早く（1～2年次）、内容の理解という点では、かなり難しいものとなっている（た）ようにも思っています！ 特に、近年では、言葉を知らないというか、概念的な理解が、かなり困難な若者（学生）が増えてきているように思います。ある意味、活字文化の衰退？ という背景が、ここにもあるのかもしれない！

なお、このことにつきましては、現在、「アクティブ・ラーニング」というようなことが、全学校段階で唱導されているように思いますが、そこにある課題意識につきましても、私なりの表現をすれば、いわゆる「体験」↓「想像」↓「創造」のサイクル（「学習のスリー・サイクル」）が、うまく駆動していないということではないでしょうか！ その原因としては、能動的・体感的な体験の不足・欠落等が挙げられると思いますが、問題なのは、そこから生起する、物事の理解や他者との意思疎通を促進させる、まさに「意味や価値の世界」を形成する「言葉」の不足・未熟なのではないか！ とにかく、この時点での「教育とは何か？」の理解は、少し早過ぎるのではないかとい

うことです！ ただし、一方の私の授業力にも、それなりに？問題はある（った）というのでしょうか？！

ところで、この授業で思い出されるのが、現在に行っていないませんが、県内の青少年教育施設（現国立沖縄青少年交流の家・県立糸満／名護／石川／玉城青少年の家）での、1泊2日の「合宿研修」であろうかと思えます！ そのでのメイン・イベントは、何と言っても、「ユース・オリンピック」と銘打った、怪しげな？レクリエーション大会でした。これは、私の国社研（現「国立教育政策研究所社会教育実践研究センター」）時代の「社会教育主事講習」の名物講義の一つであった？、H・G先生の授業の、いわばパクリではありました！ 普段は大人しい多くの学生達の、まさにエネルギーの発散の機会でもありました！ 100人以上のクラスを、4〜6つのチーム（国？）に編成し、対抗ゲーム形式で、真剣かつ楽しく時を過ごしました！ 夜は、私の教え子である、主として教員になつて先輩・卒業生からの講話、そして今では絶対にはいけない、「アをつくもの」を介しての交流会等、本当に盛り沢山のプログラムでした！

そこでは、この他、数々の思い出・とんでもない事件もありました！ 具体的なことは、とてもここでは紹介しきれませんが、要は、それらが、その後の、受講学生達の仲間関係の向上や将来の仕事への動機付けにもつながっていった！ さらに、そこでの様々な人との出会いも（職員等も含めて）、かなり意味のあることだったのでないかということですよ！ 今でも、当時の学生達の、一番の思い出ともなっているんですよ！ しかしながら、引率者（正式な大人）は私だけであつたので、まだまだ若かつたとは言え、心身ともに疲労困憊の2日間でした。ちなみに、この合宿研修をきっかけとして、協力学生グループも、その後結成されました（名前は、「ニライカナイ」！）。これが、現在のサークル（↓イノベーションNEXT）にも、どこかでつながっていると言えるでしょう？！

**(2)「教育原理」が目指してきたもの、そこにおける「生涯教育（学習）」の位置付け**

翻って、合宿研修ということ言えば、学部主催事業としての「ユークロ（ユース・クロスロード↓若者達の交差路?）」を、

忘れるわけにはいきません！ 私の赴任前に実施されていた、新入生歓迎の学部事業である「フレフェス（フレッシュユメンス・フェスティバル）」の後継事業という位置づけで始めたのですが、一番のウリは、研修（宿泊）先を固定せず、毎年県内各地域にお邪魔して、原則として本島周辺の離島でしたが、単に自分達が遊んだり、交流したりするだけではなく、地域の人々（特に、「青年会」等のみなさん）との交流、そして当地の学校訪問（ほとんどが小学校）での、子どもたちとの交流・交歓を行うプログラムでした。蛇足ながら、ユークロというのは、他ならぬ私の命名によるものでした！

こうした「体験学習」あるいは「アクティブ・ラーニング」、大学等では「インタレンシップ」とか言われていますが、まさに「出会い」、そして自ら「為すこと」によって「学ぶ」というようなことが、この事業では、「学習者」としての学生、そして将来の「教育関係人材」としての学生の学びのエキスとして、特に企画・運営スタッフの側には満載されていたように思います。ある時期は、この企画・運営スタッフに、「社会教育主事資格」関係の授業を履修している学生

が、授業の一環として参画していたこともありました。これらの体験が、教員や社会教育主事となったときに、まさしく貴重な経験となることを期待してのことでした！けれども、やはり彼らも？しんどかったことでしょうか？！

そうした中で、改めて「教育原理」という授業は、どういう意味をもっていたのでしょうか？ そしてまた、その授業の中で、終始「生涯教育（学習）」の重要性を説いてきた私ですが、それらは、その後どのような意味をもってくるのでしょうか？ 近年の関連の動き（昨年12月の中教審答申等）を見ると、やっとこれまで話をしてきたことが、単なる理想・理念ではなく、実現すべき課題・目標？として、示されてきているのではないかと、ある種の感慨を持って受け止めています！

しかし、まだまだ現場（学校教育及び社会教育の双方共？）は、その理想・理念に追いついていないようにも思えます！「チーム学校」とか、「コミュニティ・スクール（学校運営協議会方式）」と「学校支援地域本部（↓地域学校協働本部）」のコラボレーションによる「教育協働」のしくみづ

くりとか、新たなスローガンや目標が提示されていきますが、果たしてどうなのでしょう？！ これにつきましては、特に学校現場に入った卒業生達からは、「現場には、ほとんどそのような発想や言動はなく、毎日の目の前の業務をこなすことで精一杯で、いつの間にかそうした意欲や発想が無くなってしまってます！」というような言質を、しばしば聞くことがあります！ しかも、それは、この間ずっとです！ 本当に、多くの（ほとんどの？）学校現場では、依然として変わらない状況があるのでしょうか？！

とは言え、少なくとも、その理想・理念は分かるという学生は、まだまだ顕著ではありませんが、確実に増えてきてはいます！ 時代状況が、そうした理想・理念を必要としてきたということが、一番大きな理由かとも思いますが、改めて「教育」は、「学校」だけが行う、あるいは「学校」だけに責任を負わしてはいけないということですね！ そしてまた、「社会教育」も、当然そうした枠組みの中で、新たな役割を果たす必要があるということですね！ そのことは、次の二人のメッセージからも、容易に読み取れるのではないのでしょうか？！

## 豊かな体験が青少年を育てる

—学校・地域・家庭が連携・協力—

編／伊藤俊夫 ISBN4-7937-0128-0 2003年9月25日発行 A5判 144頁

定価1620円（本体1500円） 送料300円

【主な内容】Ⅰ 豊かな体験が人間をつくる／Ⅱ 体験活動を推進する（スポーツ 文化・芸術 家庭教育等）／Ⅲ もう一つの公共サービス（PTA 公民館 青少年教育施設 図書館 博物館 NPO 学校支援ボランティア 等）／Ⅳ 知恵と意欲の結晶（総合的な学習の時間 自然体験活動 ボランティア活動の教育力 唱歌と童謡 就労体験 モノづくり 農業体験等）

書店にお申し込みまたは直接日本青年館 TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9021 までご注文下さい。

**(3) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ③ K.A & M.Hからのメッセージ**

○教育原理では、「教育」は相手によくなってほしいと思い、行う意図的な働きかけ、「教育」は、学校だけで行うことではないとの考え方が、印象に残っている。大学の講義だけが勉強じゃないというわけではないが、聴講時間よりも長い時間を使い、大切にしてきたことがある。それは、大学生活の大きな構成要素となったゼミ活動や「地域教育研究会」(※現「教育協働研究会」)への参加と共に、教育現場でのボランティアや学童保育の手伝い、レクリエーション事業等を引受け、実践することである。そこでは、たくさんの人と出会い、考えに触れ、学びの幅や視点が広がった。その上で、「生涯教育(学習)」という理念のもと、学校教育はその特色を生かした教育活動を行い、「社会教育」「家庭教育」も教育活動の一翼を担うということを経験的に学び、共感した。学校教育の計画的、画一的な指導は、知識の習得という点で卓越している。しかし、知識の活用や場や機会、人との出会いを考えると、教室の中や特定の指導者の中では物足りなさを感じる。私の場合は、教育活動がどのように実践されているのか、私の得意分野を必要としてくれるところはあるのかという興味から、様々なことを「つまみ食い」させてもらった大学生活であった。

現在は、授業だけでは指導にならない、数々の出来事に直面している。生活すること全てが、子どもたちにとって学習であることを実感する。私の職場では「汎化する」と表現するが、授業で学んだこと、できるようになったことを、日常生活に活かすことを目指して、殆どの教育活動が行われている。そのため、家庭や福祉との情報交換が密に行われる。子どもたちの指導を始めると、家庭との連携、放課後支援先、地域の作業所・事業所とのかかわりを意識せずにはいられないのである。私のように、同講義を受講して、「教育とは何か」と議論し、考え、実践した人の中には、実際に連携・融合的な実践こそできていなくても、かかわりや交わりの必要性を感じているのではないかと思う。私を含め、その一人ひとりがキーパーソンとなる機会、またキーパーソンの鍵穴的、コーディネーター的な役割を担うことができるかもしれないと…かかわりが必要と思いつけることが大切ではないか。私はその思いを持って、現場に立ちたい。また、受講生や分野の垣根を超えて実践する人と出会い、協働して企画運営できればステキである。

(K県特別支援学校 教諭)

○「教育原理」を聴講していると、講義に参加しているほとんどの教育学部生が、「教育は学校で行われるもの」と考えている。実際に私も、同講義を受講するまではそう思っていた。しかし、講義が進むにつれて、決してそうではないことが分かってくる。教育に、場所も、年齢も、内容も関係ない。井上先生曰く、「教育とは、相手に善くなって欲しいという思いをもった、意図的な働きかけ」のことだという。講義の中で初めてこの言葉を聞いた時は、正直ピンと来なかったが、数々の講義を通じて、生涯教育の理念や社会教育について学んできた今なら分かる。各地で行われている市民向け講座も、企業の中で行われている研修も、高齢者を対象にした福祉関係のイベント等も、行政や民間団体による「相手によくなって欲しい」という働きかけは、全て教育に該当するのだ。学校教育だけが教育ではない。そんな当たり前のようで、存外意識されていない重要なことに気付かされた講義だった。

だが、前述の通り、殆どの学生、特に教員を目指す教育学部生は、こうした「生涯教育」の視点をあまり意識していない、または重要視していないように感じる。私の説明不足も勿論あるとは思いますが、生涯教育の魅力を他の学生に語ったとしても、理解されることは少ない。けれど、私は、子ども達に多く関わる教員だからこそ、この生涯教育の視点を持ってほしいと考えている。教育を縦にも横にも繋げ、広げていくことは、同時に子どもたちの繋がりや可能性も広げていくことが可能になる。それに加え、昨年12月の中教審の答申にもあるように、今後学校と地域との連携を推進していくのであれば、尚のこと生涯教育を学ぶべきではないのか。今では、そのように考えている。だからこそ、一人でも多くの学生に、この「教育原理」を受講して欲しいと思う。そして、少しでも自分が持つ「教育」のイメージを広げてほしい。「教育とは何か」「教育とはどうあるべきか」を学び、学生同士で考え、教えあう、まさに「教育原理」の名前の通りの講義なのだから。

(学部4年次生)

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

## 5. 「社会教育概論」に関わって

### (1) 全体として

まず、この「社会教育概論」は、もともとは通年で4単位の授業科目でしたが、大学の卒業要件（指定された単位取得の枠組み）との関係から、前期「社会教育概論Ⅰ」と後期「社会教育概論Ⅱ」に分けて、それぞれ2単位の独立科目とされています。

もちろん、これは、「社会教育主事資格」のための基礎・基本的な科目であり、前期と後期に分けてはいますが、授業内容・構成は、1年間を通したものにしています。しかも、必修です！

ちなみに、本科目（名）は、省令科目（例）においては、途中から「生涯学習概論」となりましたが、生涯教育、生涯学習、社会教育の、それぞれの概念や関係、あるいはその名称使用等に、ある種の誤解や曖昧さを残すものであったため（少なくとも私には、そう判断されたので！）、今でも一貫して、この名称で実施しています！

改めて、私としては、「生涯教育（学習）」のことについては、当然「教育原理」の中で扱うべきもので、「社会教育概論」に替えて、「生涯学習概論」にすべきとは思わなかった

のですし、今でもその判断は正しかったものと考えています！

つまり、多くの人が誤解・誤用している（た？）と思っていますが、生涯教育ないしは生涯学習は、決して社会教育の代替概念ではないのです！

社会教育は社会教育なのであり、れっきとした教育の一分野なのです！

大切なことは、その社会教育が、教育の全体構造の中で、どのように位置づけられ、どのような役割を有しているのか、そしてここが重要となってくるところですが、そうした位置づけや役割を、まさに生涯教育ないしは生涯学習の視点で見ると、どのようにになっている（く）のかということかと思えます！

さて、もう一つ、ここでは是非お伝えしたいことは、この科目が、いわゆる「教職科目」でもあり、そしてまた、誠に悩ましかったのが、「学芸員資格」の必修科目でもあったということ。もちろんそれは、ある意味正解なのですが、その対応が難しい（かった）ということ。す！

現在は、「社会教育概論Ⅰ」だけが「教職科目」となり、そしてまた、一方の「学芸員資格」関係は、別途科目提供が他学部（法文

学部)でなされ始めましたので、そちらの方の受講学生は、まったくいなくなっています!

とにかく、ある時期までは、「教育原理」もそうでしたが、この「社会教育概論」も、前・後期ともに、大人数のクラスとなり、使用教室の最大キャパで(120名。だが、それを超えて受け入れをしていたこともあった)、授業を行っていました。

しかも、ある時期から、そのほとんどが、「学芸員資格」関係の学生で占められてきて、一体誰のために、この授業を行っているのだと、一人悲憤慷慨もしていました!

そうなのです、他ならぬ「社会教育主事資格」のために受講している学生は、その大人数の学生の内、ほんの一握りの数しかいなかったのです!(それでも、今よりは多かったですかな?)

そうしたこともあって、本当に毎学期の、登録受付の際の受講学生の絞り込みや対応は、大変なものでした!

とは言え、これも、あの「古き良き時代」の、受講登録風景の1コマだったのかもしれない!

## (2) 1 「社会教育概論I」について

次に、個別的にはなりますが、「社会教育概論I」についてです。これは、先にも述べましたように、教員免許状取得希望学生にも門戸を広げたもので、言わば「教職用」の「社会教育概論」と言ってもよいでしょう!

要するに、社会教育主事資格関係の学生はもちろんですが、将来教員を目指す学生にとっても、ここでの学習は、是非とも必要なことであると思つての、テーマ・内容構成にしているということですよ!

とにかく、ここでは、「社会教育の動的理解」と称して、社会教育を、学校教育や家庭教育との関係やそのつながりの中から観て、教育の全体的・総合的な理解を求めるものとしています! その中の主たる目標が、いわゆる「教育(形態)の三層構造的理解」と「八つのキーワード」を用いた、「生涯学習体系への移行」についての理解ということになっています! その後、これに、「ひとづくり(教育)とまちづくり(地域づくり)の循環構造づくり」が付け加わってきました!

ここでは、その具体について、詳しく紹介することはできませんが、教育というのは、学校教育を典型とする「フォーマル教育」、

社会教育を典型とする「ノンフォーマル教育」、家庭教育を典型とする「インフォーマル教育」の、3つの教育(形態)の層から構成され、その基層部分としての「偶発的学習」を土台として、それらが、総合的・有機的に行われることが必要であるということ、そして結局は、そのためのしくみづくりを、いわゆる「タテの統合とヨコの統合」という、まさに「生涯教育(学習)」の理念に沿って、(再)構築していくことが重要となるということですよ!

そしてまた、それは、それぞれの地域社会(校区)を基盤に、「ひとづくり(教育)とまちづくり(地域づくり)」の双方のベクトルを創り出していくことによって実現される、そういう捉え方ということになります! なお、これについて今思い出されるのは、最初に述べたことと関係しますが、何回か前の、教職科目の課程認定の折に、かの科目(名)が、いわゆる教職科目に相応しくないという指摘(指導)を受けたことですよ!

当時の文科省では、そのように捉えていたのでしょうか、近年の状況(例えば昨年12月の「中教審答申」)を、決して先取りしていたとは思いませんが、「教育の基礎理論に関

する科目」の中の、「教育に関する社会的・制度的又は経営的事項」の一つとして（「選択必修」の形として）、この、少なくとも「社会教育概論Ⅰ」については、教職専門科目の一つとして、あるべきだと考えている（きた）のです！

## (2) 2 「社会教育概論Ⅱ」について

次に、「社会教育概論Ⅱ」についてですが、これは、現在、言わば「社会教育主事資格専修」科目として、提供しているものです。

数年前に、「学芸員資格」関係の学生もはずれたこともあり、社会教育主事資格を取得しようとする学生のみ（一部そうでない学生も入り込んでいますが）の、授業ということになっていきます。

したがって、受講学生は、現在はほんの一握りの学生となっていますが（10名前後？）、まさにここでは、一社会教育の静的理解と称して、社会教育の個別・具体的な理解を求めらるものとなっています。

一応、前期の「社会教育概論Ⅰ」を受けて、より具体的、かつ多少の専門的事項（対象・事業・法制度・歴史・施設・指導者等）を扱いますので、この科目だけの受講は、学

生にとつては、理解が、かなり難しいものとなっているようにも思います！

また、たまにいますのですが、年度の途中で（事実上は後期から）、この主事資格を取得したいという学生がいて、Ⅰを取ってⅡを取るといふパターンが崩れることや、北海道教育大学釧路校との交換留学生で、後期のこの授業が受けられず、結果として、1年後の受講となる学生もいます（した）。

ちなみに、何年か前の2年間、私が学部長を拝命していた時は、授業負担の軽減策があり、この「社会教育概論」は、私の知己の現場経験者の方に、非常勤対応でお願いしていました。

本当は、この授業だけは、自分自身でやらなければいけないと思っていた、ある意味、他の人には任せられないという自負心も有していた科目でしたが、諸般の事情で、他人に任せざるを得なかったわけです！

時たま、その授業風景を覗き？にも行きましたが、何せ、その方に全面的にお任せしていたわけですから、ある意味遠くから（かなり複雑な思いで？）、その光景を見守ることしかできませんでした？！

## 豊かな体験が青少年を育てる —学校・地域・家庭が連携・協力—

編／伊藤俊夫 ISBN4-7937-0128-0 2003年9月25日発行 A5判 144頁  
定価1620円（本体1500円） 送料300円

【主な内容】Ⅰ 豊かな体験が人間をつくる／Ⅱ 体験活動を推進する（スポーツ 文化・芸術 家庭教育等）／Ⅲ もう一つの公共サービス（PTA 公民館 青少年教育施設 図書館 博物館 NPO 学校支援ボランティア 等）／Ⅳ 知恵と意欲の結晶（総合的な学習の時間 自然体験活動 ボランティア活動の教育力 唱歌と童謡 就労体験 モノづくり 農業体験等）

書店にお申し込みまたは直接日本青年館 TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9021 までご注文下さい。

## (3) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ④ M.Y &amp; T.R からのメッセージ

○私は、野外教育のNPO職員として、子ども達の教育活動に携わる仕事をしています。学校や家庭では難しい、専門的な野外教育のプログラム提供から、地域と学校をつなぐ取り組みの支援、そして非常勤講師として、大学で社会教育の科目の指導も行っています。学生時代は、教育学部に在籍はしていましたが、教員を目指すことはせず、野外教育指導者の道を目指して、ボランティア活動や仲間と組織の立ち上げに励んでいました。それまで「社会教育」という言葉も知らず、目の前の自然と子どもとの関わりだけで動いてきた視野を、一気に広げてくれたのが、まさに4年生の前期、社会教育概論を受講した時です。

そこでは、世の中の教育活動の成り立ち、様々な教育機関や教育的要素のつながりを初めて学び、教育活動は学校教育だけではない。社会教育という領域がある。「自分達のやって来たことが、まさにここにある!」という、自分達のしてきた活動を、初めて定義してもらったという、衝撃にも似た感覚を覚えています。これが、井上先生との出会いでもありました。そして、社会教育という存在に衝撃と感動を受けたと同時に、自分の視野の狭さを実感しました。そして、目の前の活動、自分の専門性を活かすためにも、広く教育に関わる全体の仕組みやつながりを、さらに学ぶ必要があると実感したのです。まさにその時が、井上先生の下で学びたいと思った瞬間でした。

こうしてその後、仕事につながる活動を続けつつ、井上先生の下で大学院に通い、単に学術的なこと以上の、多くの学びを得ることが出来ました。学校教員も同じかと思いますが、民間企業でもNPOでも、その活動や仕事に携わると、どうしても全体像やそのつながりを意識することが少なくなります。多様な人や組織や作用が、繋がり合って成り立つ教育活動。学生の時期に、そうした基礎を学ぶことができたことは、本当に良い経験となったと思います。(NPO法人 スタッフ)

○私が、「社会教育概論」を受講したのは、2年前のことでした。それまでの私は、大学で学んでいることに意味を見出せず、なんとなく毎日を過ごしていたように思えます。しかし、井上先生と出会い、講義を受けていくうちに、「学校教育だけが教育の全てではない。社会教育や家庭教育も含めて教育なのであり、こんなにも教育は幅広いのか。」と感銘を受け、そこから、大学で学ぶことの楽しさや奥深さというものを感じ取れるようになったことを、今でも鮮明に覚えています。講義全体の中で、よく先生が私達に伝えていたメッセージは、「違いよりも関係性」ということでした。受講前まで、教育とは学校(学校教育)で行うものだと考えていた私は、つい社会教育を学校教育と比較して観ようとし、その2つの関係性というものを見落としがちでした。本当に大事なことは、それぞれの特徴というものを理解し合い、連携・協働できる部分を創り上げ、よりよいものにしていくということだったのです。これは、他の多くのことにも言えることであり、今でもそういった視点で、物事を考えるよう意識しています。

講義を受講し、先生に出会えたことで、それからの大学生活は、本当に充実したものに変わっていき、去年は、研究室(愛称:イノ研)のゼミ生として先生とともに過ごし、今年度からは、そのイノ研の意思を受け継いだ、「イノベーションNEXT」という学生サークルを共に立ち上げ、代表世話人という形で大学生活最後の1年を迎えています。これまで先生からたくさんのことを学び、またこれからも多くのことを学ばせてもらいたいのですが、私がこれまで先生から学んできた「社会教育」や「地域教育経営」「教育協働」というものは、今後の教員養成において非常に大事になってくるものだと考えています。教員になる上で、各教科の専門性、指導力というものは、もちろん大事なのですが、学校教育だけに止まらず、幅広い目で教育を観る力、また「社会教育」との関係性を学ぶことで、子ども達への教育も、より充実したものになっていくのではないかと思います。学校現場に入らないと分からない、見えてこない部分も多々あるとは思いますが、私も教員を目指している立場として、先生から学んでいることを実践に生かし、そして多くの人に、先生の考えを知ってもらえるような働きかけが、できればと考えています。(学部4年次)

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

## 6. 「社会教育計画」に関わって (1) 全体として

次に、「社会教育計画」についてですが、この科目もまた、もともとは通年で4単位の授業科目でありましたが、前号でも述べましたように、大学の卒業要件（指定された単位取得の枠組み）との関係から、前期「社会教育計画Ⅰ」と後期「社会教育計画Ⅱ」に分けて、それぞれ2単位の独立科目としているものです。

とにかく、この「社会教育計画」は、いわゆる社会教育主事の専門性（学習課題の把握と企画立案の能力／集団を組織化する能力／援助者としての能力、等）の中でも、最も中心となる資質・能力、すなわち「（自治体における）施策・事業の企画・立案能力」を育成する、ただし事実上は、その重要性に触れる？授業（科目）ということになるかと思えます！

いろんなやり方（内容・方法ともに！）が、実際にはあったのですが、私の場合は、前にも紹介しました、以前の職場であった国立社会教育研修所（現国立教育政策研究所社会教育実践研究センター。通称「国社研」と呼ばれる！）での、「社会教育主事講習」の

ノウハウ（理論的理解は「社会教育計画」、実践的理解（計画の模倣作成）は「社会教育演習」）を、そのまま活用させてもらって、前期「社会教育計画Ⅰ」、後期「社会教育計画Ⅱ」という形で行いました。

ちなみに、現在は、かなり以前の、私の授業負担等の関係で、卒業生のY. T君に、非常勤講師として、担当をお願いしています！基本的には、私のそれを踏襲してくれているようですが、その後の彼の、県の社会教育主事としての実績と経験から、一部彼なりの工夫と新しい試みを、しているようではありません?!

## (2) 1 「社会教育計画Ⅰ」について

そこです、前期の「社会教育計画Ⅰ」についてですが、これは、まさに「理論的学習」ということで、自治体（社会教育主事）が、社会教育計画を策定するにあたって、どういった知識や情報が必要となるのかの（もちろんスキルもですが！）、理論的・学問的な理解を求めるものということになります！具体的には、社会教育計画の種類と構造（中長期事業計画・年間事業計画・個別事業計画等）、その、それぞれの計画の作成の意

義と計画内容、そして、その中の、年間及び個別事業計画の作成の視点と手順が、それに相当します。

これらについては、上でも述べましたように、国社研での実績？（経験）もありましたので、しかも、そこで作成されているワークシート（後には、ある種のテキストとしてまとめられ、市販されるようにもなりました！）を活用して、それに沿って授業を行いました。ちなみに、そうした実績？（経験）を積んでいたこともあり、特に「年間及び個別事業計画の策定の視点と手順」については、いくつかの市販本の執筆者として名を連ね、多少その分野での専門家？ということにもなりました？！

なかなか、そうしたレベル（分野？）の研究者が、大学等にはいなかった？ということでしょうが、授業を進めるにあたっては、そうした自分のテキスト／ワークシートの内容が頭に入っていたので、ある意味スムーズに、それを行うことができたように思います？！

ただし、受講学生にとっては、ほとんどが、聞いたことも、見たこともないような用語、内容等であったため、この授業が、一番苦戦した（もどかしかった？）のではないでしょ

うか？！ その意味では、授業者側の私も、一番てこずった授業だったようにも思います？！

## (2) 2 「社会教育計画Ⅱ」について

次に、後期の「社会教育計画Ⅱ」についてですが、これは、「実践的学習（計画の模倣作成）」ということで、実際に、ある自治体（原則として市町村！）をモデルとして想定して、その教育委員会（事務局）の社会教育主事という前提で、本物？の社会教育計画を策定してみるという、実践的・応用的授業でした。

基本はグループ学習ということでしたが、ある意味仕方がないのですが、先程も述べましたように、ここでの学習内容は、若い？学生達には難解で、現職者を対象とする社会教育主事講習のようにはいきませんでした？！

要するに、社会教育主事講習の場合は、受講者が、一応現場経験がある、ないしはそうした職場に今いるということでしたので、例えば行政のしくみや予算執行の手順等は、ある意味お手の物ですので、計画の模倣作成は、スムーズにいったのですが、学生の場合は、ほとんどそういう経験がないわけですので（しかも、正直に言いますと、私自身も、そ

うした自治体での作成経験は、ほとんどありませんでした！）、よく言えば、理想的、悪く言えば、かなり現実離れした（実現可能性がない？）計画（案）を作ったものでした？！

そういうこともあって、そのモデル市町村となってもらったところには（ほとんどが、別途並行して行っている「社会教育実習」で世話になっていた！）、改めて、そのための資料提供や現場取材にに応じていただくとともに、最後の授業では、計画発表会と銘打って、大学の方に足を運んでもらって、その出来栄等についてコメントをいただくというような、一種のコラボ授業？を行っていました！

なかには、かなり手厳しい指摘・批判？もありましたが、本当にありがたいものでした！

ところで、この授業としては、いくつかのグループに分かれ（基本は対象別！）「現状と課題（の分析）」「年間事業計画」「個別事業計画（学習プログラム）」、そして「案内らし（広報用学習プログラム）」を、そのグループごとに作成するのですが、なかなかまとまった時間が取れないということもあって、グループでの討議・意見交換があまりうまくいかない場合が多く、結局は、個々の役

割分担、あるいは特定の誰かが、かなりの負担を負って進めるという形が、多かつたように思います！

私としては、極端に言えば、出来栄え（企画の面白さや実現可能性等）はともかくとして、グループ全員で、計画策定のプロセスを共有し合い、どこをどのように配慮すればよいのか等を（「計画Ⅰ」での学習の確認？とその成果の発揮）、まさに四苦八苦ししながら、模擬体験してくればよいと思っていました！

要は、中身の問題は、実際の現場で大いに悩み、自らの実体験で積み上げていってくれればよいと、思っていたということです！

そんな中で、私が一番意を用いていたのは、「現状と課題（の分析）」から得られた、それぞれの「（全体）社会教育目標」と「個別社会教育目標」、「（全体）社会教育行政目標」と「個別社会教育行政目標」の策定と、そこにおける文言の適正化でした！

何故なら、そこには、全体の目標と個別の目標の関係と整合性、そして「教育目標」と「教育行政目標」の違いや関係性の理解が絡んでいるからです！

多くの現場では、どうもそのあたりが、い

い加減なのではないか（あまり考慮していない?!）と思っていたことも、その理由でした！

なお、今、聞くところによりますと、社会教育主事養成の新たな論議があるようですが、とにかく、この「社会教育主事」（の専門性？）については、その大前提が、「教育委員会の事務局に置く専門的教育職員である」というところを、改めてどう考えるかではないでしょうか！

現在の論議では、端的に、「コミュニケーション・オーガナイザー」？といった点が強調されているようですが、これが、その大前提と、どう整合するのか?!

すなわち、当地の社会教育施策や事業の企画・立案等の任務（専門性）は、どうなるのか?!

それともう一つ、資格取得の不便緩和？も意識されているようですが、本当に、それでよいのか?!

ある意味、現実（実態）を採るか、理想（理念）を採るか、というようなことかもしませんが、私としては、本当は、双方は別立てで捉えられて欲しいものだと、考えてはいます?!

## 豊かな体験が青少年を育てる

—学校・地域・家庭が連携・協力—

編／伊藤俊夫 ISBN4-7937-0128-0 2003年9月25日発行 A5判 144頁

定価1620円（本体1500円） 送料300円

【主な内容】Ⅰ 豊かな体験が人間をつくる／Ⅱ 体験活動を推進する（スポーツ 文化・芸術 家庭教育等）／Ⅲ もう一つの公共サービス（PTA 公民館 青少年教育施設 図書館 博物館 NPO 学校支援ボランティア 等）／Ⅳ 知恵と意欲の結晶（総合的な学習の時間 自然体験活動 ボランティア活動の教育力 唱歌と童謡 就労体験 モノづくり 農業体験等）

書店にお申し込みまたは直接日本青年館 TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9021 までご注文下さい。

## (3) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ⑤ S. S &amp; Y. K からのメッセージ

○私が、「社会教育計画」を受講したのは、約3年前の大学2年次の時でした。本来なら、3年次になって行く「社会教育実習」と同時期に受講し、互いを関連させて学んでいくことが望ましい形でした。その王道の形をとらずに講義を受けていたことは、当時の私からしてみれば、「自分のやっていることが、あまり理解できていなかった」というのが、“本音”だったと思います。そのことを特に実感させられたのが、いくつかの市町村をモデルにして、社会教育事業の企画・立案を行った「社会教育計画Ⅱ」の講義内容でした。というのも、各市町村での実習を経て、そこで得た知識や発見した課題等を見つめ直し、各々の事業展開を考える上で、ニーズの把握、もしくは限定や人員・予算の配分等、様々な面への注意をはらいながら、1つの企画として組み立てていくはずでした。

しかし、講義を受けていた当時の私には、そこまでの認識はなく、その後2年間のゼミ活動の中で、軽々しく考えていた認識の甘さに気付くことが出来ました。今となって、その過程(大学生活)には、失敗とまでは言わないものの、過去の自分(浅い認識)との比較によって得られた、大きな学び(成長)があったと考えています。そして今、社会人1年目としての道を踏み出した私ですが、1年足らずのこの生活の中でも、ちょっとした考え方の変化がありました。非常勤としてではありますが、「学校」という場にその身を置き、教育協働を目指していく上で、上述した社会教育事業の企画・立案のように、ある程度の「協働の型」を計画・立案することは、今となっては、多くの事例や実践も紹介され、さほど難しいことではないように思います。

しかも、社会教育計画の講義のように、型を模索することも必要な事ではありますが、そこへさらに $\alpha$ で、その出来た型を如何にして運営していく、ないしは活用し、発展させていくのかということまで見通し、考えていくことが大切となってくるのではないかと。それこそ、それぞれの人の思いや働きかけ、「キーパーソン」「コーディネーター」としての役割を果たす人の重要性・必然性が見えてくるのではないかと。これに関しては、机上の学習だけではなく、身をもって経験してきたように思います。ただし、まだまだ経験も浅く、見えていないことも多いので、今後とも学び(成長し)続け、今の自分からの更なる飛躍を成し遂げたいと思っています。(F小学校・臨時教諭)

○社会教育計画の授業は、まさに自分自身が社会教育主事になった気分、授業に臨んでいくものであった。前期の社会教育計画Ⅰでは、教育委員会で社会教育主事がどのような職務を行っているのか、どういった計画を立てるのか、その仕組みの流れを学んでいった。後期の社会教育計画Ⅱでは、実際に、計画を自分自身で立てていったが、ここでは自分が計画を立てたい自治体を選び、その概要を調べていくことから始まった。私は、自分の育った故郷をクローズアップし、市民の生活状況の特徴や、教育・文化的環境の状況と課題等を調べていった。

考えてみると、大学生になるまで、ここまで自分が生まれ育った地域を、詳しく調べたこともなかった。かなり興味を持って取り組むことができた。調べていくと、私の地域は畜産や農作物が盛んで、過疎化がかなり進んでいることに気が付いた。若者が地域からどんどん離れているという現状と、地域活性という視点から、私は“ふるさと納税”に注目した。これを軸に、実際に社会教育計画を立ててみて、実感したのは、地域に対する熱意と愛情である。社会教育主事という職務を行っていく上で、その地域を良くしていきたいという熱意と愛情が、社会教育主事という存在を盛り上げていくとを感じる。

私は、小学校教員を目指している。社会教育主事関係の授業を受講していくと、学校教育とはまた違った、新たな視点を多く学ぶことができた。教員の多忙化が顕著になっている現在、地域の力を活用して、子ども達を育てていこうという流れができつつある。そして、その動きは現場の教員のためにも、大きな手助けになる。地域の子供は、地域で育てるとい言葉がある。学校の教員も、地域の一員である。子ども達が、自分が育った地域に対して、誇りを持つことができれば、それは将来、地域を良くしていきたいという、熱意と愛情に変わるだろう。その信念は、いつまでも大切にしていきたい。(学部4年次)

## 第7回

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

### 7. 「社会教育実習」に関わって

(1) 現場に行く（お世話になる）ことの重み  
〜全て学生の行動（主体性）に委ねる！〜

次に、「社会教育実習」についてですが、これは、文字通り社会教育の現場に行つて、実際の仕事を体験してみろという授業です。今で言う、「インターンシップ学習」あるいは「サービス・ラーニング」といったところでしょうか？ 現在の授業時間は、実習系科目ということで、45時間2単位（通常の講義の場合は、30時間2単位）という設定で行っています！ 基本的には、2年次から、関係の科目を計画的に受講することになるわけですが、ある意味、この授業を、いかに他の関係科目との関係において、有機的に噛み合わせていくかということが、ここでの最大のポイントになるかと思えます。

ということ、この実習は、一応1年間の基礎科目を終えて、3年次になり、社会教育計画（Ⅰ）を同時履修しながら、夏休み期間（現在は8〜9月）に、学生と受入れ先の合意のもと、ほぼ1週間位の日程で行うことにしています。その前にオリエンテーションをやり（大体2か月前）、どこにお世話になるのか、その実習先のことを考えたり、選んだ

りするとともに、実習の心構えや、本番に当たって、どういうことをやっておけばよいのか等を、事前学習することになります。そのために、希望先やその希望の動機とか、実習において、具体的にはどんなことを行えばよいのか等を用紙に書かせて、自らのモチベーションや、いい意味での緊張感を醸し出すことをねらっているということです。

もちろん、公的な「実施要項」を作り、それを基に、受講学生に実習のイメージを伝えるのですが、多くの学生は、私からの情報提供・ガイダンスとは別に、それを体験した先輩達に、いろいろと尋ねてもらうようです。近年では、前にも述べたかと思いますが、受講学生が減り（10人前後？）、そのせいで、実習先の数も少なくなっています。これを始めた頃（25年くらい前）は、受講学生も多く（あるコースの必修科目としていたこともあった！）、最終的な実習先決定までには、かなりの時間と苦労が伴いました！

ところで、今では、受入れ先には大変申し訳ないのですが、その選定においては、全て受講学生の自主的な行動に委ねており、彼らが、一応先方からの内諾を得てくるまでは、原則として、私の方からは、依頼の連絡は行

っていません！ もちろん、その後の事務的な手続きは、私の方で行っています（学部事務部の協力で！）。これにつきましては、おそらく賛否両論があるかとは思いますが、どんなに苦勞？してでも、自分の実習先を、自らの行動で勝ち得ていく！これが、別の意味で、この実習の良さ（ウリ？）となるのではないかと思うからです！

ただし、始めた当初は、私の方も、いくら近隣の自治体に知り合いがいるとか、出入りもしているからといって、一方的にお願い、お世話をしてもらうのも恐縮であり、失礼でもあると思うって、全ての実習先に、足を運び、依頼の挨拶も行っていました！今では、お互いの関係もできたこともあって（冷静に考えれば、受入れ先の担当者は入れ替わっていくので、そう思っているのは私の方だけかもしれませんか?!）、基本的には顔を出していませんし、電話での挨拶もやっていないのです！

ある意味、先方にとつては、甚だ失礼な態度と受け止められているかもしれません、それもこれも、受講学生が、100%自分の力（行動）で関係を築き、現場体験をして欲しいということですか?! しかし、多少本音の

部分では、毎年一人で同じことをやっていることに、かなり疲れてきた（どこかで手を抜きたい?）という思いが、頭をもたげてきたのかもしれません! いずれにしましても、受講学生には、なかなかそうした実感は、とりわけ最初のうちはもてないとは思いますが、まさに「お世話になる」ことの重みを、彼らには体感して欲しいということですよ! 今はやりの「アクティブ・ラーニング」の要素が、ここには、それこそふんだんに盛り込まれていたとも言えるでしょう!

しかしながら、そういうこともあってか、当時（かなり以前?）は、例えば打ち上げ会?をやるというので、よく私にも呼びかけがあり、お礼も兼ねて出かけ、飲食をともにしたものでした! また、そこで、さらなるつながりもでき、その後の関係（講演依頼や委員委嘱あるいは計画づくりの業務委託も含めて!）にも発展していきましたが、今は、ほとんどそういうことはありません!

(2) 学生側、迎える側、双方にとつての意味  
それがなければ、あまり意味がない! ということで、以前とはかなり異なっている（と感じているだけ?）、この社会教

育実習の授業ですが、一方で、学生側、迎える側、双方にとつて、この授業は、大変意味のあるものではないかとも思っています! 学生が実体験をさせてもらうということは、もちろんですが、たとえ短い期間であったとしても、若い学生（達）が、普段はあまり若者がいない?事務所に顔を出し、将来に向けて一生懸命学ぼうとしている姿をみて、自分（達）の日常の仕事を見つめ直したり、そういう若者（達）とコミュニケーションを取ることにより、リフレッシュ、あるいは何か新しい刺激をもらう機会となったりというようなことも、考えようによっては、重要なことなのではないでしょうか（これは、私の都合のいい解釈かもしれませんが!）

これにつきましては、私が、この授業で、ある意味頑固に貫いてきたことは、この実習先を、市町村の教育委員会の事務局（原則として近隣の!）、すなわち社会教育所管課にするということでした! 表向き?は、社会教育法の規定に忠実でありたいということでしたが、単なる社会教育の経験だけでなく、私は、そこで働いている（苦勞している?）、まさに本物の社会教育主事の姿を、彼らに見てもらいたい、あるいは可能ならばその人を、

いわゆる「意味ある他者」の一人として、位置づけてもらいたいということでもありません！

もつとも、忙しい？ 職場で、わざわざ時間を割いて、彼らの指導（世話？）をするのですから、迷惑、仕事の邪魔というようなネガティブな面も、本音の部分では、それなりにあるうかとは思いますが。しかし、それを乗り越えて、次代の人材養成、あるいは自らの後輩育成ということで、積極的に対応してもらいたいという思いからでした！ 虫のいい話かもしれませんが、その思いは、時が経つにつれて、大きくなっていました！

結果的には、どこまで学生達に響いていたのか？！ 特に最近では、かなり弱気？ にならざるを得ませんが、オリエンテーション時に、彼らに語気を強めて言っていたのは、「とにかく『人』を見てこい！そして、気になったその人の考え方、仕事の仕方を学んで来い！」ということでした！ そしてまた、彼らの実習先決定の要因？（自宅から近い、自分の地元だ、駐車場が確保できる）もさることながら、彼らが、私に希望先の相談に来たときには、そこに、そうした「意味ある他者」となり得る人（職員）がいるかどうか、そのこと

を、ある意味さりげなく（本当は露骨に?!）、彼らに告げたりもしていました！

ただし、これも、最近では、そうした自治体の職員とはあまり関わっていませんので（顔ぶれが常に代わっている！否、忌避されている?!）、そういったレベルでの指導？は、ほとんど出来ていません！ 以前のことを思うと、何か残念、否、淋しい気もしますが、それもこれも、時の経過、世代交代、そして私の制度疲労？というところで、仕方がないのかもしれない！

とは言え、そういうこともあって、往時の状況とはかなり違ってきてはいますが、その年度々の学生の雰囲気・意欲等、そして何より、それをきっかけとした、新たな関係づくりが望めると思う場合には（今年度のU市のように!）、かなりの介入？無理矢理の実習先選定？を、行うこともあります！

末尾になりますが、きちんとした申し送りや対応マニュアルも作り（本当に頭の下がる思いです!）、最初から、変わらぬ理解と協力を頂いている自治体もあります。妙な感じですが、この場を借りて、感謝申し上げます！

## 豊かな体験が青少年を育てる

—学校・地域・家庭が連携・協力—

編／伊藤俊夫 ISBN4-7937-0128-0 2003年9月25日発行 A5判 144頁

定価1620円（本体1500円） 送料300円

【主な内容】Ⅰ 豊かな体験が人間をつくる／Ⅱ 体験活動を推進する（スポーツ 文化・芸術 家庭教育等）／Ⅲ もう一つの公共サービス（PTA 公民館 青少年教育施設 図書館 博物館 NPO 学校支援ボランティア 等）／Ⅳ 知恵と意欲の結晶（総合的な学習の時間 自然体験活動 ボランティア活動の教育力 唱歌と童謡 就労体験 モノづくり 農業体験等）

書店にお申し込みまたは直接日本青年館 TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9016 までご注文下さい。

## メッセージ・コーナー

(3) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ⑥ N. A & N. Yからのメッセージ

○私が、社会教育実習を受講したのは、今から4年前の、大学3年次の時になります。実習先は、自分が関心を持っていた「コミュニティ・スクール」を、その時設置するO市にさせて頂きました(しかし、所管する課が違い、設置準備段階の詳細を聞くことはできなかつた!)。何よりも当時、理論的な学びだけではなく、実際に自分の五感を通して学べることに、胸を躍らせていましたし、夏休み期間中で、時間は十分にあったとはいえ、1週間という貴重な休みを使って行くわけですので、「どんなに細かいことでも吸収してやろう!」という意気込みで、臨んだのを覚えています。

実習内容も、業務の説明、社会教育施設の見学や講座の運営・見学など、普段では絶対に経験できないようなことをさせて頂きました。その中で職員の方をはじめ、地域の方々や講座講師の方と話をしていく中で、臆気ながらですが、“求められる社会教育主事”の在り方が見えてきたように感じました。また、見えてきたからこそ、1週間という時間が短く、物足りなさも感じ、卒業後は、U市で社会教育指導員として、1年間勤務しました。

その勤務先では、実習を受ける側ではなく、受け入れる側として、社会教育実習の一部を担当しました。そこで得たことは、受ける側への配慮が大切だということです。自分の説明の途中で、「にーぶいしている」(沖縄方言で、眠気と戦っている様)学生がおり、最初は、「やる気あるのか、こいつは!」と思っていましたが、その後で、自分の中でインパクトの無い説明や、単調な説明をしていたからではないかという反省に繋がりました。ある一コマでの出来事ですが、このことから、私の社会教育実習は、受ける側だけではなく、受け入れる側にも得るべきものがあり、受講した後も、自分の認識や学びの浅さを、再確認できるものでもあったと思います。

(F小学校・非常勤講師)

○社会教育主事の資格を取得するための講義のひとつに、社会教育実習があります。45時間、社会教育施設や教育委員会で実習をするのですが、その一週間で、それまで学んできた社会教育の知識が、やっと理解できた気がします。私は、県内のG村という、人と人の距離がとても近い小さな村で幼少期を過ごしました。大学一年次の初め、井上先生の講義を受けた際、自分の育った環境を思い出し、もっと深く勉強をしたいと思ったことが、私が今、社会教育を学んでいるきっかけです。今回の実習では、たまたま地元の教育委員会にお世話になることができました。その間に、村立図書館、博物館の業務体験と、村内6区の公民館に行き、職員体制や公民館講座の内容等を調査し、レポートにまとめることが実習内容でしたが、ほとんどの施設が普段から行き慣れた場所であったことで、逆にとても緊張しました。

後半の、公民館調査に行った際に、デイサービスに行くことのできないお年寄りのためにミニデイサービスがあることや、塾に行くことのできない受験生のために高校入試対策講座が開かれていたこと、公民館は区民の誰でも利用可能な施設であることを知ることができ、これが、「生涯学習とは、いつでもどこでも誰でも学べること」という事前の知識と繋がることができました。一週間の実習を通して、幼い頃から私が経験してきた社会教育は、行政の方や各施設の職員さんの、地域の人のためにという思いがあり、単純に田舎だから、人と人の距離が近いから、充実しているわけではないと実感しました。今回は、たまたま自分の地元で実習をすることができたため、これまで講義で習ったことを踏まえ、自分の経験を違った視点から見て、社会教育について理解を深めることができました。これからは、他の市町村、または全国のどの場所でも社会教育主事として働くことになっても大丈夫のように、機会を見つけて、社会教育の現場に行ってみたいと思っています。実習でお世話になったみなさん、本当にありがとうございました。

(学部3年次)

## 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上 講四

### 8. 「社会教育課題研究」に関わって

(1) 資格関係科目の集大成者若者（学生）達の

の気づきとアクション（実践行動）

次に、「社会教育課題研究」についてです。

この科目は、社会教育主事資格関係の最後の科目で、まさに、その集大成とも言える授業です！ ここでは、受講学生達が、それまでに学習（経験）してきた、社会教育に関わる様々な知識や情報をもとに、自らの関心事・テーマを選定し、各自が、言わば「ミニ卒業論文作成」という形で、鋭意取り組むものです！

基本的には、2年次から順調に単位を取っていきますと、3年次の後期、何らかの事情でそれができなかった場合は、4年次の後期の履修ということになります！ ただし、4年次後期の履修ということになれば、後にも述べますように、ほとんどが、もう一つの、つまり本物の「卒業論文作成」と併行しての取り組みとなりますので、相当の労力と踏ん張り（精神的タフさ?!）が求められるということになります！

ちなみに、近年では、この授業も、別の非常勤講師（彼もまた、私のゼミの卒業生である！）に任せてきましたので、私とし

ては、その授業の推移を見守ることしかできていません!!

本当は、専任である（つた）私が、最後は締めたかったのですが（それが本務?!）、今はそれも出来ていませんので、せめて構想発表や中間発表、そして最後の「最終発表会」には、出来るだけ顔を出して、彼らが、どのようなテーマで、その最終の学習（研究?）をやっているのか、興味をもって（責任を感じて?）見届けることにはしてきました。

しかし、今年度は、残念ながら諸般の事情で、それはできませんでした！ また、恒例の社会教育計画（Ⅱ）との「合同発表会」も出来ませんでした！ ただし、社会教育計画Ⅱの発表会は、それと同時並行的に開催しています「教育協働研究会」の1コマとして、組み込ませることはできませんでした（全員の発表は、叶いませんでしたが!）。とにかく、この授業は、社会教育主事関係の最後の授業ですので、私が、受講学生達に期待してきたものは、いかにそれまでに、彼らが、自らの社会教育、ひいては教育全体への気づき（興味・関心）、さらには課題意識を創り上げてきたのか、そしてま

た、その課題研究（ミニ論文作成）に当たって、これまで培ってきた実践力あるいは現場へのアプローチ能力の発揮、すなわち彼らの「アクション（実践行動）」が、どのような行われるのかというようなことでした！

今年度は（も？）、そのことがよく分かりませんでした。これまでの実施状況では、驚くばかりのプロセスと成果を挙げた学生もいれば、それこそ、これまで何を学んできたのか？と、疑問を呈せざるを得ないような学生もいました！しかし、それは、ある意味当然と言えば、当然だったのかも知れません！

(2) 本当は、卒業論文への誘い?!だが、多くの学生にとっては、また別の思いが?!

と言いますのも、やはり現実には厳しい?。もので、多くの受講学生達にしてみれば、この社会教育主事関係の授業は、あくまでも「社会教育主事」という、一つの取得可能な資格の学習（受講）であって、例えば、私が昨年3月まで所属していました「子ども地域教育コース」の学生であれば、すべて卒業要件ではないのですが（いわゆる

「ゼロ免課程」!）、小学校教諭免許（I種）、幼稚園教諭免許、そして司書教諭資格と、それらを全て（あるいはほとんどを!）取得する学生もいて、この「社会教育主事資格」を第一義的に捉えている学生は、あまりいませんでした!

しかも、年度によって変動はありますが、受講学生の数も、徐々に減ってきています! ある意味、当該コースの名称からもお分かり頂きますように、このコースの学生（のそれなりの部分）が、まさに専門として学ぶということを前提としていた訳ですが、その資格の有用性（魅力?）が、現実には、そんなに大きくはない（と思っっている?）ということでしょうが、この学生達にとっては（も?）、事実上はプラスαの資格である（った）ということでもあるのでしょうか! ただし、こうしたスタンスは、それ以前の、私が所属していた専修やコースの学生も、根っ子は同じだったものとは思いますが! ましてや、その他の学科・コースの学生においては?、ということになります!

とは言え、その中でも、やはり何人かは、この資格を第一義的に捉え、私のゼミに入

っても来ました（資格なのか、ゼミの雰囲気なのか、かなり曖昧?な部分もありますか?!）。しかも、ほとんど手前味噌?かもしれません。ゼミ生として入ってきた学生達は、かなりの期待がもてる学生もいて（途中でリタイアした学生もいました!）、その彼らにとっては、この授業は、まさに4年次での卒業論文への誘いということでありました!

もつとも、実質的には、私のゼミ生だけではなく、他の学生達にも、そのような期待はもってはいましたが、私の期待しているような流れで、自らの卒業論文に繋がれるのは、やはり、それを主たる目的としている私のゼミの学生達だけであり（そのゼミ学生達も、常にそれに、十分に応えてくれるわけではない?!）、私の思いや対応は、本当に複雑ではありましたが!!

ということ、基本は3年次ではありませんが、本音は、この授業をバネに（一つのジャンプ・アップとして）、この分野に関する問題意識や研究を深め、各自の卒業論文に繋げていって欲しい、そして出来れば、その成果が生かせる道（職）に向かっていくって欲しいと思ってきました! けれども、

その道に進むことは、現実的にはかなり難しく、しかも、専門職扱いでの採用もほとんどなく、モチベーションとしては、なかなか高まらない?! それはそれで十分、理解はできるものでしたので、私にしてみれば、この学生は、将来かなり有望ではないかと思つてはいても(そういうことを誘うようなことも、何度かしたことはありませんが?!)、ほとんど、そのようにはならなかった?というところもあります!

もちろん、結果的に、例えば市町村の職員に採用された学生が、社会教育主事(相当する職も含めて)として、一定期間働くということはありましたが(例外も、一部あります!)、私の方も、少し考え方(戦略?)を変えて、例えば学生達が、直接的には「社会教育主事」として、その世界(行政)に身を置かなくても、現実的には、その資格や学習(経験)が、何らかの形で生かされるのであれば、そちらの方に期待?しようということにしてみました!

その中には、かなり遠い将来?ということになります、教員として一定期間活躍し、その後何かの縁で、社会教育(行政?)の世界に入っていくことが出来ればと、期

待もしてきました!(皮肉にも、現在、そういう人材が学校現場で必要とされてきている?!)

(3)そこに行き着か(け?)ない学生もいる?!

逆に、途中で飛び込んでくる学生もいる?!

ところで、本授業は、最初にも述べましたように、人数は多くはありませんが、毎年数名は、この4年次での履修となり、もう一つの、自分の専門学科・コースの卒論作成と重なり、当該学生にとっては、かなり厳しいものとなっています?! したがって、その具体的な状況・事情は分からないのですが、やむを得ず途中で断念する学生私としては、4年次での履修となると、本当に厳しい状況での対応となることを、機会あるごとに語ってきてはいるのですが、その時は、何とかかなると思うのでしょうか?! 実際にその時を迎えると、その現実を負けて?しまうのです?!

何とも可哀そうな感じもします(した)し、はつきり言えば、誠に残念なことでもあります?! 特に、それまでの履修を、私

の目からすれば、かなり頑張っていて、ある種の期待を持たせる学生であれば、なおさら複雑な思いに駆られます?! と言うより、一つの社会的な損失ともなるのです?! それでも、今では、懐かしいといしか言えません、そうした学生で、例えば大学院入学後に、残りの単位を取りに来た学生もいました!

そうした学生の中で、今でも鮮明に覚えているのが、国語科の学生だったかと思いますが、中学校の教育実習に行つて、具体的には何故そう思つたのか、詳しくは覚えていないのですが(確か、地域の協力とか、「地域の教育力」が必要だと感じたということだった?!)、どうしても「社会教育主事」の勉強(資格取得)をしなければいけないということで、無理を覚悟で受講し始めた女子学生のことです(3年次後期からの履修だったかな!)。本当に頑張り屋さんで、現在、高校の教師をやっていると思いますが、どのようにやっているのでしょうか?! 最近、まったく音沙汰はありませんが、やはり重くて、辛い、そして多忙な?日々、飲み込まれているのでしょうか?!

## メッセージ・コーナー

(4) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ⑦ U. H&O. Tからのメッセージ

○「社会教育課題研究」(以下、課題研究)は、井上先生が先に書かれているように、「ミニ卒業論文作成」といった方が伝わりやすい。「社会教育」を学ぶ中で、自分自身が関心のあるテーマを1つ取り上げ、調査を行い、まとめていきます。「社会教育主事資格」を取得する上で、最後の関門となる講義でもあり、私自身も、悪戦苦闘したのを、今でも覚えています。

この授業から私を感じ取ったポイントは、2つあります。1つ目は、「考えの深まり」です。受講前には「ふわっ」としていた、「社会教育」に対しての考え方が、受講後には、一本芯が通ったような感覚がありました。1つのテーマを、様々な視点から掘り下げていくことによって得られた、結果だと考えています。また、「課題研究」で取り上げた内容を、さらに深めたいと思い、それをベースに卒業論文を作成しました。深めたいと思ったテーマを、3年次の時点で設定できたことは、とても大きかったと考えています。

2つ目に、これも井上先生が書かれているように、「行動することの重要性」です。少し話は逸れますが、大学生活において重要なことは「行動すること」だと、私は考えています。社会に出る前の準備期間として、どれだけ行動し、多くの経験を積むか。そこでの経験は、社会に出て無駄にはなりません。「課題研究」では、テーマに対しての情報収集・インタビュー調査をする過程において、「行動力」が試されました。まだ大学生だった自分にとって、初見である目上の方々に調査をするというのは、緊張することではありましたが、そこで得られたものは、文献や新聞から得る情報とはまた違った、「生きた内容」でした。行動した分だけ研究内容が深まり、優れた考え方を持った人との出会いがあり、自己成長に繋がる。「課題研究」は、「行動することの重要性」を、私に気づかせてくれました。

今回は、ポイントを2つに絞って紹介させていただきました。学生時代を振り返るキッカケを与えて下さった井上先生に感謝し、また当時の経験を活かしつつ、今後も一社会人として日々精進していきます。  
(学習塾経営)

○私は、「社会教育課題研究」を、3年次後期に受講しました。前で書かれているように、私たち受講生にとっては、社会教育主事資格関係の最後の科目であり、最終関門でした。この授業は、これまで学んできた社会教育の中で、興味関心のある部分を取り出し、そこに存在する課題を研究し、小論文を作成していくという流れでした。やはり、最終関門ということもあり、これまで学んできたことや現場の人々の話、先生方のアドバイス等を、総合的に組み合わせて、進めなければならぬ難しさがありました。

私は、「公民館」を取り上げ、そこにおける課題である、施設数の減少や貸し館化などを挙げ、今後の公民館の役割を考えていきました。研究を進めていくと、公民館の現状は、すごく厳しいことが分かりました。そこで、今後、公民館が、どのように歩いていく必要があるのかを考えていく中で、他の社会教育施設や、学校、地域にある施設などと繋がるという考えに辿り着きました。つまり、ゼミの共通テーマである「地域教育経営」という考え方でした。

このように、「社会教育課題研究」を受講し、進めていく中で、これまで学んできたことを統合し、自分自身の考えとして表していく力を、身につけることができたと思っています。また、井上先生がよく講義などで話す、「物事を見るとき、違いより関係性を!」ということも、しっかりと実践できたとも思っています。ある意味、これらは、社会教育を学ぶ中で、実践していく中で、重要な点と言えるでしょう。やはり、この経験があり、このような力を身につけることができたからこそ、今、自分自身納得のいく卒業論文を執筆し終え、卒業という1つの節目を迎えることができたと思っています。

今後、小学校教員を目指していく中で、このような力を活かし、色々なことを伝えていきたいと思えます。また、その中で、子どもたちが、このような力を身につけていくことができるような根っこを、育てていけたらと思えます。  
(元学部4年次)

## 第9回 「地域教育経営演習」に関わって

# 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

### 9. 「地域教育経営演習」に関わって

(1) 新たな目的・方法論としての「地域教育経営演習」

今回は、少し扱いは違いますが、「地域教育経営演習」についてです。まず、この授業は、昨年の3月まで私が所属していた教育学部教育組織「子ども地域教育コース」の専門科目、具体的には、新しくゼミ選択を行った3年次のための、いわゆる「ゼミ」の専門科目（選択必修）の導入として位置づけられている授業です。

実は、これは、私にとっては、それ以前の「島嶼文化教育コース」（「生涯教育課程」の旧組織の一つのコース）時代の、ゼミ専門科目ではありましたが、心機一転（「地域」に焦点を当てて！）、その科目を、当時の学部改革に伴って、新たな組織に再編した時の、言わば「目玉コース」（専修・コース）としては、最大の学生定員30名）のうちの領域（発達教育・学校外教育・幼児教育・地域教育経営）の、一つの専門基礎科目として、再スタートさせたものです。

さて、この授業も、前にも述べましたように、大学の単位取得の枠組み（ルール？）

上、前期「地域教育経営演習Ⅰ」、後期「地域教育経営演習Ⅱ」に分けて提供してきましたが、もちろん内容、あるいは授業の連続性という意味では、事実上は、通年の授業ということになります！

ちなみに、私のゼミ生は、この1年間で、当該コースの専門領域の一つとしての、「地域教育経営」の理論と実践の双方を学び、それを踏まえて（発展させて？）、4年次で、各自の卒業論文へと向かうということでもあります！

なお、この授業は、当該コースの専門科目ではありますが、制度上は社会教育主事の必修科目ではありません！ したがって、この授業は、社会教育主事関係の「社会教育特講」の一科目（選択科目）として、全体としては位置づけられました。

ただし、私のゼミを選択した学生（基本的には、全員が社会教育主事の資格を取得することを前提！）にとっては、コースの卒業要件科目でもあり、社会教育主事関係の専門科目でもある（った）わけです。

原則として、週末（金）の午後の1コマを、その時間に充ててきましたが（これを、

最近では「プチゼミ」と呼んできました！、必要に応じて、その時間の前後に、準備作業をしたり、研究会等を実施したりする、ということになるわけです！

以下、一応、前期提供の「地域教育経営演習Ⅰ」と後期提供の「地域教育経営演習Ⅱ」に分けて、その授業内容（活動）を紹介しておきたいと思えます。

(2) 1 「地域教育経営演習Ⅰ」について

まず、「地域教育経営演習Ⅰ」についてですが、これは、私のゼミを選択した3年次学生にとっては、まさしく「イノ研」（私のゼミは、学生達からは、このように呼ばれていました！）デビューの場であり、その洗礼？を受ける場でもあったわけですね！

その授業（活動）は、事実上は、先輩4年次と一緒に、論文・雑誌記事等の輪読・講読、前期研究会等の企画・準備・運営、それに関わる研究室通信「南風の国から」（現在は、その後継「岳陽」）の発行といった、文字通り「演習」という名の話し合い、実践・行動、そして、反省を含めた報告という、今で言う「アクティブ・ラーニング」

であったわけですね！

ただし、この前期の「地域教育経営演習Ⅰ」は、3年次にとっては、それこそ4年次の後ろ姿を見ながら（どういう時に、どういうことを、どのようにすればよいのかなどを、基本、見よう見まねで学習していくということ！）、各自が、出来得る限りのことをやっていくスタンスとなっています。「模倣」、あるいは「為すこと」によって、学ばず（learning by doing）「まさにそういうことであつたのです！

(2) 2 「地域教育経営演習Ⅱ」について

次に、「地域教育経営演習Ⅱ」についてですが、これは、繰り返しになりますが、前期を受けた、後期提供の科目ということになります。ここでは、前期と同様に、先輩4年次と一緒に、論文・雑誌記事等の輪読・講読、後期研究会等の企画・準備・運営、研究室通信「南風の国から」（↓「岳陽」）の発行等を行っていくわけですが、一番の違いは、それまでと違って、立場・スタンスが、逆転するということです！もちろん、それは、4年次が、卒論に専念できる

ためではありません（そもそもの出来ないことも、ままありますが？）！

しかし、長年この光景を見ていますと、この時期（立場・スタンスの逆転状況）が、学生（ゼミ3年次）が、最も飛躍的に伸びる時期のように思います！誠に手前味噌と言われるかもしれませんが、本当に「ジャンプ・アップ」するのです！ 妙な言い方になりますが、まさに「少年から青年へ」と、変貌を遂げるとも言えましようか？！ただし、残念ながら、ここでリタイアする学生も、極一部ですが、います（した）！ある意味、ここで真の青年？になることを忌避したというようにも、言えるのかもしれませんが、責任への重圧とか、仲間との軋轢等が、否が応でも、顕在化してくるということでしょうか？！

(3) ゼミ（↓サークル活動）とのリンク

ところで、この授業は、まさに前期、後期とも、別途行っている研究会（現在は、「教育協働研究会」という名称・位置づけでやっております、基本、大小ありますが、1月に1回のペースで行っています！）、これに

関わる各自の覚悟というか、やりがいというか、そこに意味を見出していけるかどうか、その後の行く末を大きく左右することになります！

つまり、はっきり言って、大変忙しく、そして負担も大きくなっていくのです！そのため、本当にこのゼミでよかったのかと、悩んだりもするのです！

したがって、生半可な参画や表面的な協力姿勢では、本人も辛いでしょうが、周囲も大変困ることにもなるのです（特に、当人がPL（プロジェクト・リーダー）や編集長となった時！）。

一応、全員応分の負担、役割分担でいくのですが、結局は、誰かが肩代わりをしたり、見えない所でのフォローをしたりとか、多くなっているのです！よく言われる「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」の部分に関係するのかもしれませんが、別の要因（深いレベル？）でのそれであった場合は、私にしてみれば、本当に複雑な思いに駆られます！

途中（「事後」でも、構いませんが！）、本人がそのことに対して、本当の意味で陳

謝したり、思い直してやる気を見せたりして、首尾よく事が運ばばよいのですが、何せそこは、やはり青年（少年？）のこと、必ずしもそのようにはいかないこともある（つた）のです！

そして、それが、ある意味何回も続くと、それこそ、研究会・機関誌の発行等による、理論あるいは問題・課題意識の共有、それに伴うゼミの紐帯づくり（多少、時代遅れ？の感もあるが！）、さらには、各自の卒業の進捗（その後の進路選択も含めて）といった、まさにイノ研のゼミ活動の真髄？に、大きな亀裂？を走らせることにもなるわけです！

それ故に、この授業は、一種のサークル活動でもあり、実際上は、それとのリンク（一体性？）を、名実共に有している「チームブレイン」だということでもあります！

もちろん、その間に行う「ゼミ合宿・旅行」、あるいは、偶にいく「食事・飲み会？」等の雰囲気・盛り上がりにも、それなりの（大きな？）影を落とすことにもなるわけですよ！けれども、他ならぬ当人（達？）が、そのことに気づかない（頓着しない？）ま

ま、過ぎ去っていくことも、ままあります（した!）。もちろん、結果的には、それでいいのだと思います！

いずれにしましても、少なくとも、そうした2年間のつき合いがある、つながりが出来上がるからこそ、学年末に行う「もう一つの卒業式」（3月初旬に行う、最後の「研究会」の一つの目玉プログラム？であるが、当然正規の大学の「卒業式」とは異なる！一種のパロディとも言える!）において、それぞれの学年のスピーチ・思い出話が、それこそ（雰囲気誘われて?）、青春の、貴重な一時を彩るのです！

傍で見てきた私も、彼らのその姿には、特に感慨深いものがあり（時にはもらい泣きもする!）、最後になった今回も、時間はあまり取れませんでした、いつも通り敢行しました！

本当に、この光景は良いものです！そんな時、私の2年間（実は27年間!）が、まさに報われたような気にもなるのです！（本当は、私の思い込みなのかもしれませんが……）

## メッセージ・コーナー

(4) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ⑧ K・H&M・Yからのメッセージ

○私は現在、福祉関係のNPO法人で、不登校や発達障がい、生活困窮世帯の子どもたちの支援をしています。大学2年生の冬、悩みに悩んだ末に、井上ゼミに入ることを決めました。その決め手となったのは、ゼミ活動をしている先輩方の姿でした。意見を出し合い、一つのことに向かって進んでいたり、その成果を発表する場である研究会では、堂々と話していたり…そんな先輩たちに憧れを持ち、それまで「何となく」大学生生活を送っていた自分を、ステップアップさせる機会にしたいという思いもあり、「地域教育経営演習」を履修しました。

正直、ゼミ活動が始まってからの、大学3年生からの2年間はとても慌ただしく、楽しかったとは言えません。大学の講義のほとんどは、先生の話聞いて、そのまま時間が流れる…「受動的」です。極端に言ってしまうと、授業に出席しさえすれば、単位をとることができてしまうこともあります。

そんな中、この授業では、研究会の企画・運営、「南風の国から」の発刊など、全てを学生自身ですることになります。チームの誰かが納得できていない内容だったり、自らが動かなかったりすれば、全てがストップします。ただ、あの時期に、「チームで考える」「自らが動く」という経験ができたことは、とても貴重だったと思います。また、研究会では、学校や社会教育の現場で働く多くの方々からお話を聞かせていただき、自分自身の、社会教育に対する視点の広がりや理解の深まりもありました。それは、卒業論文の執筆にもつながっています。

ゼミ活動を行う中で、「学校教育だけでは、できないこともある!だとしたら、自分がしたいことは何か」と考えて、就職活動を始めました。「いつでもどこでも誰でも学べる」、それは、私の関わる子どもたちと同じです。「不登校でも、そうでなくても、障がいがあってもなくても、子どもたちの学びを支えていきたい」、そう気づくことができたのは、ゼミ活動での学びや、共に活動した仲間がいたからこそだと、心から思います。(県外NPO法人職員)

○「地域教育経営演習」を最初に受講したのは、今から2年前の3年生の時、所謂「ゼミの時間」で、毎週金曜日の5限目でした。そこでは、毎月(毎月)送られてくる教育新聞や各種雑誌記事に、各自、事前に目を通し、「ぜひゼミ生に伝えたい事例だ!」というものを、このゼミの時間で全体に共有し、考察していきました。しかし、より具体的なゼミの活動を考えると、本当に多岐に亘り、どこからどこまでとは線引きが付きません。逆に言うと、これまで「社会教育」として、あらゆる講義で学んできたことを、このゼミの時間を使って、実践、報告、深化させる時間でもありました。その大きなものが、今も毎月行っている研究会です。その研究会に向けて、企画を練ったり、チラシや資料の作成、それに併せてインタビューに行ったり、機関誌「南風の国から」(→「岳陽」)はどのような記事にするか、ゼミ生同士で悩み・考える時間でした。

最初3年生は、受講しながら、これまで先輩がどのようにゼミで学んだり、話し合ったりしているのかを見て、真似ていきます。初めのうちは何もわからず、出来ず、迷惑をかけないようにと、一生懸命についていくのがやっとでした。雑誌の記事はどのように選んでいるのだろう、研究会のチラシはどのように作成しているのだろう、ゼミに関わってくださる大人と、どのように接しているのだろう等々、近くで先輩を見て、ゼミ活動を一緒にやって、だんだん覚えていきました。先輩が卒論で忙しくなる後期の「地域教育経営演習Ⅱ」では、私たちの学年が主体となり、研究会を企画・運営、ゼミの時間に何を、何を話し合っ、何を決めるか等を考えていきました。それは本当に大変で、その時改めて、先輩達の偉大さを実感しました。

この授業を通し、様々な役割を与えられ、それを達成できるやりがいを実感し、さらに、今まで学んできた社会教育や教育協働について、実践できる大変貴重な時間でした。学生のうちに、こうした活動ができたことは、とても有意義で、自身にとっても、プラスになっていると感じています。(元学部4年次)

## 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

### 10. 「地域社会と学習・文化」、その他の科目に関わって

#### (1) 現実と理想の狭間の中で

次に、社会教育主事関係の授業として、「地域社会と学習・文化」、及びその他の科目について、紹介（回想？）してみたいと思います。なお、ここで言う「その他の科目」とは、いわゆる「社会教育特講」の科目として位置付けてきたものですが、これは、事実上、資格取得に必要な総単位数（24単位）を賄うために、ある意味無理やり？、位置づけてきたものということもできます?! しかし、もちろん、内容・テーマ的には、社会教育に関わるものということとはできます!

いずれにしても、それらの授業（科目）は、他の専修・コース、あるいは専門の違う教員が提供するものですので、こちらとしては、出来るだけ社会教育に関わる部分を意識して欲しいとは思ってききました。が、残念ながら、それ以上のことは、何も言えなかったのが実情です。以前は、専門・専用の科目として、「社会教育行政」とか「諸外国の生涯教育」とかを独自に開設し（「集中講義」での対応も含めて）、ほと

んどが外部からの非常勤講師を招いたりしながらの対応でしたが、別な意味で（現場経験者や他大学の教員、あるいは留学生との出会い・交流等）、大きな意味をもっていました!

とは言え、このシリーズの最初にも述べたかと思いますが、大学の非常勤講師予算の逼迫もあり、そうした科目（授業）は、今では開設できなくなったために、現在では、例えば「教職選択科目」の「教育行政学」や課程（生涯教育課程）共通科目の「健康と栄養」というような科目を、それに位置づけ（授業担当者が、積極的に協力してくれているのかどうかは、本当のところ？は分かりませんが!）、必要な単位数を確保しているということになります。この辺りが、まことに複雑で、ある意味忸怩たる思いで、何とか凌いできたということでしょうか?!

さて、改めて、標題の「地域社会と学習・文化」の授業についてですが、これは、私が、琉球大学赴任3年目に、私が所属していた「教育学専修」の専門分野の一つとして開設したものです! 社会教育主事養成の新機軸（もちろん当時の...）として、

「地域に目を向ける」「教育・学習とは銘打っていないが、事実上それに相当するものにも目を向ける」ということで始めたものですが、その後の学部改組に伴って、「島嶼文化教育コース」、そして「子ども地域教育コース」の専門科目（コース全体の「必修科目」として、改めて提供してきたものでもありません。ただし、その後、繰り返しになります。私の科目提供の負担の問題もあり、現在は、この科目も、大学院卒業生のM・Y君に、「社会教育課題研究」とともに、非常勤対応で、協力をお願いしてもらっているということになります。

ちなみに、上記しましたように、この科目は、当該コースの専門基礎科目の一つとして位置づけられ、現在の「子ども地域教育コース」では、所属学生全員が履修する、いわゆる「コース必修科目」の一つとなっています。したがって、毎回多くの学生（基本2年次前期）が受講していて、担当教員には、大変な労苦をかけていることになります?! もちろん、社会教育専攻資格の取得希望者にとっては、この科目も必修科目となりますので、資格取得希望の、他の学部・学科・コースの学生達（人数は少な

いのですが）は、多くの受講学生の中で、かなり異質な（少し違和感のある？）受講となっているようです!!

## (2) 地域に目を向ける意味

ところで、この授業は、社会教育というよりは、学校教育や家庭教育も含めて、そしてまた、「教育」という用語、あるいはそうした自覚？はないものの、結果的には、その「教育」に相当するもの（「教育」という用語や位置づけは、ある意味関係者や実践者には、少し硬い、あるいは烏滸がましい? というような気持ちや受け止め方があることも事実?! さらに、多少のアンチテーゼも、そこにはある?!）、あるいは教育の全体というものを、人々がそこで生きている、その地域社会それ自体に見つけ、そこにおける、まさに「学習・文化」の諸相を把握し、そしてまた、それらを実現、牽引する人に焦点を当て、その意義と可能性を見出して（実感して?）いこうというものであったということですが。

要するに、文字通り、そこにある、そこで繰り返し広げられているということの大切さ、意義というところのことを、人が生きていく・人が生き合っているという意味での

「地域社会」、それ自体に見つける、あるいは「地域社会」を、そのような視点で見つめ直すことの大切さを、社会教育専攻を目指す、あるいはそうしたことを、将来の仕事・生活に活かして欲しい若い学生達に知ってもらいたい、実感してもらいたい、まさにそういうことで始めたということであります!

ただし、実際には、学生達が、自分（達）で探した、目にした記事や情報は、ほとんどが、そうした意味合いあるいは位置づけを、直接前面に出しているわけではありませんが、ある意味個別の、あるいは個人志向的な実践・活動ということになり、それを取材・考察する学生（達）にしてみれば、そこまでの視点や膨らみは、期待していたよりは、やや少なかつたようにも思います! 後のメッセージ・コーナーにもありますように、「個」と「個」の関係で、それを見るところとかと思いますが、ぎこちない理屈の積み重ねや、最初から高邁なスローガンで、それらを斬る? というようなことよりは、まずは、そういうことの良いのだとは思いますが! 特に、最近では、そうした思いを強くするものです!

### (3) 実践家、「意味ある他者」との出会い

そんな中、改めて、この授業で大切にしてきたものは、狭い意味での「教育実践」だけでなく、まさに地域づくり（まちづくり）全般に亘って視野を広げ、そこにおける仕掛人・キーパーソンを探し出し、事業・活動の全体像を調べて、発表するということでした。なかなか、受講学生達には、辛い？授業ではあったと思いますが、これが、この授業のウリでもあったのです！

具体的には、授業を三段階に分けて、まずは、沖縄県内の事例、次に、県外の事例、そして、最後は、そうした事例収集・取材等で知った・出会った人達に、直接会って、まさに「その人」に着目して、視野を広げる、あるいは刺激を受けるということであったのです！言うなれば、「意味ある他者」との接近・遭遇ということでしょうか！

なお、末尾になりますが、この授業の成果発表という形で、ある時（最初で最後！）、ローカル出版ということではありましたが、『若者が捉えた地域社会の波動―教育・学習運動としてのムラオコシ・まちづくり考―』（金城印刷アポロ出版、2000年）という本にしてみました。あまり（ほとんど？）

売れませんでした。そこに載せていた「〈特別論考〉―教育・学習運動としてのムラオコシ・まちづくり運動の意義と可能性」の中の、以下に示す最後の部分は、まさにこの授業の開設趣旨の背景であり、しかも、今でも、十分通用するメッセージではないかとも思います！

：「生涯学習体系への移行」あるいは「生涯学習社会の実現」は、ある時、突然ふつと天から降ってくるものではない。地道な努力と明晰な判断力が、必要である。与えられる教育から、自ら取捨選択し、学び取る教育へと移行しなければならぬ。それは、個人にとっても、社会にとっても必要不可欠なものであり、手をこまねいていたりすれば、地域社会は、単なる個々人の物理的な居住空間のみに墮さざるを得ない（現時点でもかなり危ういが！）、今、地域において必要なのは、人々の学習であり、そこから生まれるエネルギーや知見あるいはアイディアなのである。それに呼応できない「まちづくり」は、完全に危うい。憂うべき数々の問題は（教育の問題といえども）、全てこうしたチャンネルにリンクしていることを知るべきである。

## キャリア支援学習を社会教育施設で円滑に実施するためのハンドブック 「親子と地域でキャリア支援学習のための実践マニュアル」

- ユニット1：「キャリア教育」と各施設や団体等（社会教育 生涯学習センター PTA・学校 公民館 図書館 博物館 青少年教育施設・女性教育施設）関連の章です。
- ユニット2：「座談会」は、社会教育（施設）におけるキャリア教育の方向性を探っています。
- ユニット3：「チェックシート」がこのハンドブックの「目玉」。チェックシートを活用した「キャリア教育」教材。
- ユニット4：キャリア教育に参考になる40サイトを紹介。

\*B5判 88ページ 銅布価格 500円

\*問い合わせ 社会教育編集部 TEL 03 (6452) 9021 FAX 03 (6452) 9016 メール leh07376@nifty.ne.jp

## メッセージ・コーナー

## (4) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ⑨ T. M &amp; T. Wからのメッセージ

○私が、「地域社会と学習・文化」を受けたのは、大学3年の時でした。地元が好きで、地元のために何かしたいと思っていた私は、「社会教育概論I」で、「社会教育主事」という資格があることを知りました。これからの地域活動に何か役立つことが学べると思い、この資格を取ろうと決めました。「地域社会と学習・文化」が、社会教育主事の資格を取ると決めてから最初に受けた講義です。法文学部3年次だった私は、他学部の一学年下の学生と講義を受けるということで、最初の授業は緊張していました。

ここではグループを作り、県内外の、各地で行われている「地域活性化」「まちづくり・むらおこし」「地域内での生涯学習活動」等につながる活動を調査しました。講義の最後には、「地域づくりの仕掛人」をテーマにキーパーソンを見つけ、取材をしました。課題を達成するには、自ら色々な所に足を運んで、インタビューをする必要がありました。今振り返れば、皆、他の講義の合間を縫って、インタビューやレポート作成を頑張りました。そのおかげで、充実した時間を過ごせました。

私は、この講義を通して、3つのことを学びました。まず1つ目は、「地域のつながりには異世代間の交流が大切」。2つ目は、「時代の変化に伴った活動ができるように工夫する必要がある」。3つ目は、「活動を継続して行くことが大切」ということです。地域のつながりを作るには、年齢や性別を問わず、みんなで関わっていくことが大切です。つながりがあるからこそ、より良い地域づくりをすることができると思います。インタビューした中で一番多かったことが、「活動を継続することが大切」ということでした。活動を継続することで、それが、地域になじんでいけるのです。「焦らず、ゆっくりと」が、必要だということを学びました。

当時の私にとって、他学部へ飛び込むということは、とてもハードルが高く、相当な勇気があることで、資格を取ることに、とても時間をかけて悩みました。しかし、あの時に、その恐さから逃げずに資格取得を決意したことで、地域活動へのヒントが見つかり、とてもすばらしい仲間と出会えたので、良かったと思っています。

(県内NPO法人職員)

○私が、「社会教育」の授業を受講したきっかけは、井上先生と出会ったことです。入学間もない頃、教育学部棟のモモタマノ木の前で先生が挨拶されたとき(オリエンテーション時の学部長挨拶)、この先生の授業を受けたいと思ったのです。社会教育に関する授業は、主に2年次、3年次で受講しました。その中でも、3年次に受講した「地域社会と学習・文化」では、学校教育と社会教育の繋がりは、「個」が作り出すことを強く感じることができました。この授業では、地域の人々の中からキーパーソンを探し、インタビューを行い、発表するという活動を行いました。私は、放課後、小学生に学習支援を行うおばあさんと出会いました。その方は、「地域の子ども達に何かできることをしたい」という思いで、活動を始めたそうです。この出会いをきっかけに、私自身も、子ども達の前で講座を行い、社会教育に携わっている実感を味わうことができました。

この授業を機に、これまで学んできた理論や理念が、腑に落ちるようになりました。学校教育と社会教育の繋がりを作るという大きな目標ではなく、誰かのために何かをしたいという“思い”を持ち、行動する大切さを感じました。教育活動全体から学校教育と社会教育を捉えていた以前よりも、“個”を知ることで、より身近に社会教育を感じるようになりました。誰かのために何かをしたいという“思い”は、学校教育に携わる教員も社会教育に携わる人も、変わらず持っているものです。「社会教育」を学ぶことで、“思い”が“個”を通じて伝わっていくために、私自身、何ができるか、様々な視点から考えることができるようになりました。

“文化”とは、人が人のために行動を起こし、伝えていくことで、築いていくものです。文化を継承するための手段の一つに、“教育”があります。そして、一人一人の“学び”があります。“地域社会”で生きる人々が“思い”を共有し、“文化”を築く場は、学校以外にも様々です。教育する場は、学校だけではないのです。卒業する今、教員を目指す私にとって、学校教育だけでなく、「社会教育」の視点をもつことができたのは、大きな財産となっています。(元学部4年次)

## 若者（琉球大学生）達の学びを見つめ続けて

—教育学部に社会教育主事資格取得プログラムがあることの意味—

教育協働研究所 代表（琉球大学教育学部 元教授） 井上講四

11 「学社融合と学びの共同体づくり」に関わって

(1) 新機軸としての取り組み

さて、いよいよ社会教育主事関係の授業の紹介（回想？）としては、これが最後となります。ここでは、一番新しい授業「学社融合と学びの共同体づくり」について、書いていきたいと思えます。

まず、この授業は、私にとっては最も新しい、しかし最後の学部教育組織「子ども地域教育コース」での、そして、そこでの私の分野（「地域教育経営」）での、まさに「新機軸」としての取り組みとしてスタートさせたものです（心機一転、かなりの力を入れてきたということですよ！）

もちろん、その新しいコースの専門科目の一つとして位置づけましたが（と言っても、昨年の改組で、このコースもまた無くなることになりましたが！）、もう一つは、大学での社会教育主事資格取得関係の科目、いわゆる「省令科目（例）」の「社会教育特講」の一つとして、鋭意追加したものであります！ 対象学年は、基本的には、2年次（後期）ということになります。ちなみに、「学びの共同体」という用語は、

ご承知の方もいらっしゃると思いますが、ある著名な教育学者の表現というか、概念であるかと思えます。

要は、その用語が、先に世に出ていたということですが、私は、その方の表現（概念）を、ただ単に借用したのではなく、私（達）が望む「学社融合⇩教育協働」は、まさにそれ（⇩そうした表現に相応しいもの！）を生み出していくものではないかと考え、敢えてこういう授業科目名としたということですよ！ いずれにしても、当然、私のそれ（「学びの共同体」）は、当該地域社会全体で、あるいはその中に、構成員みんな（子ども達も含めて！）、創り出していくものということになります！

ということで、改めて本授業は、「別途行われている『教育協働研究会』（原則として毎月1回）との連動の中で、地域社会と学校の連携・協力についての現状と課題を考察する。なお、この学習の成果及び継続発展の形として、他の関係科目（具体的には「社会教育計画Ⅰ・Ⅱ」、「社会教育実習」、「社会教育課題研究」等）につなげていく。」ことを目的に、「全体として、大きくは次のような理解のプロセス・結果を問うことと

したい。1. 「学社融合」の理念とその具体的な方向性が理解できたか。2. 「学びの共同体づくり」の意義とその具体的なイメージが把握できたか。3. 将来の自らの職種をイメージしながら、具体的な取り組み構想が得られたか。」を評価の観点として、「前半は、フリー・ディスカッション、ワークシヨップ等を用いて：理論的な学習を行う。後半は、フィールドワーク等も行いながら：実践的な活動を行う。」としてきました。(以上、「シラバスより」)

## (2)「教育協働研究会」との連動、そして、そこにおける学生達の飛躍?!

とにかく、この授業は、私が長年主張してきた「学校と地域の連携・協力」の必要性、別言すれば、「ひとつくり(教育)とまひとつくり(地域づくり)の循環のしくみづくり」をテーマ(課題)にして、学生の理論研究と現場実践(関係者)のコラボ授業という形で、実現させたものです! すなわち、これは、これまで別途、多種多様に実施してきた、外部に向けたあるいは外部の人達との協働による、基本的にはゼミ主導の研究会(「おきなわ自由大学」↓「地域

教育研究会」↓「教育協働研究会」等と、名称は変えてきましたが!)と、直接連動させたものということでありませう!

ただし、この授業は、科目としては、年度半分(後期)のもので、そのゼミ主導の研究会は、もう半分(前期)の、以前に紹介した「地域教育経営演習(Ⅰ)」と連動させて、行ってきたということになります。

ところで、お分かりのように、この授業は(も?)、期せずして?、近年あちこちで、大声で提唱、取り沙汰されている、いわゆる「アクティブ・ラーニング」(能動的・協働的学習)の、言うなれば、大学での実践の先駆けだったのではないかと自負できる?、理論学習と実践活動の融合を狙ったものだと言えらると思いませんか?!

実際、前にも書いたかと思いますが、学生達は、まさにこの授業(機会)をきっかけに、あるいはこれを介して、ある意味驚異的に?伸びるのです! そのメカニズム?については、なかなか上手く説明は出来ないのですが、いわゆる「経験値」的には、如実にそれが分かるのです!

とは言え、その年々の受講学生の顔ぶれ

も、当然違いますので(実力はもちろんですが、意欲やキャラも含めて!)、毎回、毎回が、すべて期待しているようには展開できず(主として、プログラム展開?)、人知れず?苦慮してきたことも、あることはあります! けれども、全体としては、上記の「アクティブ・ラーニング」さながらの活動(学習)によって、受講学生の質、と言うか、レベルアップには目を見張るものがあり(本当にそう思います!)、この授業を敢行したことを、秘かに喜んでる昨今でした!

## (3)「教育協働」の理論と実践の融合!

ただし、継続、そして「しくみづくり」の難しさ?!

このように、ここでは繰り返しになるかもしれませんが、現実的には、成果の実感も多々あったことは事実なのですが、やはりその限界というか、難しさも、それと同じくらいに感じさせるものでもありました!

その評価の観点は、かなり複雑とはなりますが、大きくは「大学の授業としての、しかも学生達の学び」に関わる部分と、「大

学の授業の一環ではあるものの、実践者・関係者との融合研究会、あるいは実践のためのアクションやしくみづくりに向けての仲間づくり、すなわち「学者者（成人）の活動（学び）」に関わる部分の、その双方を、どのように見ていくかということになるかと思っています?!

それは、ある意味、当然なのかもしれませんが、後者の観点から見ると、やはりその限界というか、かなりの無謀さ?を露呈させていると言えるのかもしれない?!

端的には、参加者が少ない、と言うより、一定の継続的な参加・協力が少ない（ない?）ということかと思えます! 特に、年度が変わり、職種や立場が変わると、折角それなりの理解や協力関係が出来ていても、それが無くなってしまふ、あるいは弱くなってしまふということ。そういう中で、改めて思いを奮い立たせ、また新たな呼びかけや関係づくりへのアクションを取ることになるわけですが、残念ながら、その繰り返しということにもなるわけですね!

しかも、この後者の観点に関わっては、参加・協力者の善意や友情?だけでは、か

なり難しいということかとも思っています!

職種・立場あるいは家族状況（子育てや親の介護等も含めて）の違い、そこに、いわゆる「仕事」あるいは「研修」という位置づけがないということが、その大きな理由かとは思いますが、あるいは、ひよつとしたら、価値ある（有益な?）「活動（学び）」とはならないという、出会い・交流のプログラム自体の問題があるのかもしれませんが?!

だけれども、もし、そうであったとしても、それはそれで認めなくてはならない部分であり（多少哀しい?思いもありますが?）、やはり致し方ないことかとは思っています! しかも、それは、ある意味学生側にとっても同じことが言え、毎年毎年同じことの繰り返しと言え、そうなのかもしれません! それが、大学での授業の、言わば宿命?なのかもしれないということですね?!

したがって、別な意味では、この授業の限界ということかもしれませんが、最近では、そのことを「いい意味での限界」と捉え、極端に言えば、この授業（事業?）は、そうした単年度毎の人の出会いや交流を企

画・実行することが、事実上の役割（ウリ?）と捉え、たとえ顔触れやメニューが変わっても、それはそれで良しとしようと考え、実施してきました!

連続性・継続性、さらには発展性ということでは、私の期待するものとはかなり違う?のですが、いずれにしても、こうした二つの観点を同時に満足させる学び（出会いや交流の場）は、必要ではあっても、なかなか現実には厳しいということでしょうか?!

しかし、やりようによっては、「大学（生）」の存在は、まさしく意義と可能性のあるものということではあります! 地方の国立大学は、例の「ミッションの再定義」において、「地域と共にある大学」「地域に貢献する大学」を、自他共に選びました! 私（達）は、こうした方向性に、残念ながら今、直接関与することはできませんが、これまでの人間関係や成果を生かして、私（達）なりに、これからの創り出していければと考えています! 今後とも、ご理解とご協力、そして可能ならば、ご支援を、よろしくお願いする次第です!

## メッセージ・コーナー

(4) 若者(学生)たちは、このように思っていた! ⑩ F. K & U. Mからのメッセージ

○「教育は、学校だけでは成り立たない。」確かそういうことを考えて、「子ども“地域教育”コース」に入学したのを覚えています。それは、私が、高校時代に学校外での地域の活動で、様々な大人と出会い、色々な考え方に触れてきたからだと思います。私自身そういった経験が、これからの子どもにも必要だと感じ、地域教育経営という、井上先生の研究を学びたく、このコースを志望しました。そんな想いをもちつつ、大学では、先生の授業を中心に学んできました。

その中の一つの「学社融合と学びの共同体づくり」では、当時の「地域教育研究会」と合わせて実施し、様々な現場で頑張る大人達と関わりあう機会の多い授業でした。特に研究会での資料作成や学生発表では、折角来て頂く大人達に無駄とにならないように、最新の情報を学生で熟考し、資料にまとめ、それを私達なりに発表していたかと思えます。私達(ゼミ生)にとって非常に大変でしたが、様々な意見を出し合い、また大人の方達からの叱咤激励(厳しいツッコミ!?)も多かった研究会でした。その間、「出張研究会」と称し、県内離島(宮古、石垣)での研究会も行いました。旅行気分になりながらも、様々な現場で頑張る大人達を、この目で見ることができました。

このように、寝食を共にし、多くの大人達と出会い、叱咤激励され、仲間達と意見を言い合い、大人達の前で発表し、厳しい指摘を受けて、非常に刺激の多い授業(ゼミ・授業)だったと感じています。当時は、一生懸命にやっていたので、あまり自分達の状況などを客観的に見ることが出来なかったのですが、今考えれば、こういった研究会やその下準備等が「学びの共同体」になっていたのかなと感じます。

大学で学んだ「地域教育経営」という考え方や「学社融合」等、きちんと理解している自信はありませんが、大学でのゼミ活動・社会教育主事に関わる授業・研究会で学んだことは、社会に出た今も、凄く活かせるものばかりだったと実感します。そういった経験を濃く積んだ大学の4年間であり、中心にゼミ活動があったと思えます。今は、民間企業に勤めていますが、大学入学当初の想いは今もあるので、これからも井上先生の指導を仰ぎながら、自分のステージで大学の学びを活かしつつ、頑張っていこうと思えます。(民間会社勤務)

○社会教育主事の資格を取るための講義の1つとして、「学社融合と学びの共同体づくり」という講義があり、私は、今回、この講義を受講しました。この講義は、全部で15回、ディスカッションやワークショップ等を用いて、地域社会と学校の連携・協力について考えていきます。講義の前半では、「学社融合」とは何かを、現状や課題も合わせて学びました。何回か講義をした後に、社会教育と関係のあることで知りたいことを、受講学生で提案し合い、それらを「学校(学校教育)に関わること」、「社会教育を実際に行っていること」、「地域、地域の人」と、3つに分類しました。さらに、この講義では、理論を学び、考えたことから実践をつくるということで、受講学生が3つのグループに分かれ、各テーマに合わせた授業づくりをしていきました。

私たちのグループでは、「学校(学校教育)に関わること」というテーマのもと、学校現場で行われている「総合的な学習の時間」を通して、教育協働を考えることができなにかについて、授業をつくりました。この授業は、研究会(「教育協働研究会」として位置づけられ、現場の教員の方をお招きして、お話を聞くことが出来ました。大変、貴重な時間でした。研究会では、社会教育と学校教育をつなげるためには、その橋渡しの役割となるコーディネーター的な役割を持つ方々が、重要な役割を担う、ということを確認することが出来ました。

私は、社会教育について学ぶまで、「教育」とは学校で行われるものだ、という認識しかなかったのですが、社会教育も家庭教育も、子どもや大人を育て、地域づくりをしていくものであるということ、講義を通して、実感を伴って理解していくことが出来ました。教員を目指す立場として、このような理解ができたことは、私にとって、非常に価値のあることだったと思います。これから、私にできることは何かを考え、実行していけたらと考えています。(元学部3年次)